

明治四十年六月二十日發行

(非賣品)

北辰會雜誌

第四拾七號

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌第四十七號目次

- 南下隊の勞を謝す……………雜誌部委員
- 與信州俱樂部……………吉村寅太郎

論 說

- 體育小言……………鬼川老夫
- コーデリヤ論一節……………た、り、
- 文學と人格……………其 月 生
- 學界の危機……………富田愛次郎
- 狂夫言……………河合良成

雜 錄

- 滿韓瞥見記(續)……………入 江 生
- 現代思潮瞥見……………富田 愛人

文 苑

- 陸軍中佐中西君墓碣銘……………村上 函峯
- 盾守る少女(續)……………靜池庵 譯
- 和歌詠草……………四高和歌會
- 春三十句……………秋 雨
- 四高俳句會席上即吟集……………

北辰時評

- 藤井悌君に與ふ……………河合良成
- 暗流錄……………

各部報告

- 野球部報……………
- 庭球部報……………
- 音樂會記事……………

南下隊の勞を謝す

夢なれや。關西千里、野に青草なかれよ。ばかりに門出したるあゝ南下隊も、京洛の天柱地維、碎けよ裂けよとばかりに喊聲をあげたるあゝ南下隊も、加茂の河畔、石白さ邊、比叡の麓、麥青きとき、敗殘又敗殘、しばし圖南の翼を収めつゝ、やをら長鳴の機を待たざるを得ざる運命に陥りぬ。嗚呼鬼をも挫く荒丈夫をして、狐泣くてふ吉田の原、私に征衣の袖を絞らしめし者果して誰の罪ぞ。

雪と霰とに追ひまぐられし野球勢、陽春の回來するに勢を得て、ホット息吐く暇もあらせず、大兵既に南へ動くと傳へ聞き、後世の批判を如何にせむ、いかで吾獨り止まるべけむやと許り、鎧は破れたるがまゝ、太刀は錆びたるが儘、背水の陣を張りて進みしぞかへすゝも不覺の極みなりける。次いで攻めたる劍道軍、勇士が胸の熱烈は見よ三尺の秋水に籠れり、いで味ははして呉んず喰らはして呉んずと、切りに打ち下したる太刀風は、譬へば北天吹き荒ぶ白山嵐の如く、北溟鳴響く狂濤にも似たりしかども、三高勢の鋭鋒遂に當り難く恨を吞んで退きぬ。たゞ吾中堅を固めたる柔道勢は、蹴突縦横、三高を敗り六高を走らせ、猛虎雲霓に嘯いて地上敵なきを恨みし。の概は、聊か痛快の感ありしと雖も、最後に全軍勝敗の重任を負ひて現はれ出でたる庭球軍の武者振、げに雄々しくも勇々しくもありしものを、あはれ吹き下す比叡嵐の無念さ、白き花のみ止めつゝ、紅き花をば散らしける。

されど吾等は南下隊の前に滿腔の同情と感謝を捧げざるべからず。二百に余る青年を率ゐて何の欠点なく何の失敗なく、堂々として北歸せし南下隊の勞を謝す。敗るゝも怒らず、勝つゝも驕らず、武士道の眞髓に則りて勇ましくも戦ひ、美しくも應援したる南下隊の勞を謝す。更に蠻カラを以て根底とせる四高ニズムのある所を天下に告白して憚らず、識者をして強健なる學風を驚を喫せしめ、現代學生界尙ほ這般の朴訥叟あるかと三嘆せしめたる南下隊の勞を謝す。

南下隊諸兄、兄等は敗れたりと雖も未だ眞に敗れたるものにあらず、かくの如き効果多き敗北ならば余等は寧ろ勝利よりも敗北を期待して止まざる者也。

南下隊者兄、幸に加餐せよ、例へ兄等が校友は石の如くに冷かなりとも、例へ兄等が校友は兄等を迎ふるの術を知らず兄等を慰むるの策を施さずとも、兄等の行動にして正々堂々たりし以上は、兄等の行動にして武士道の本義に適ひたる以上は、乞ふ毫も戚々たることなかれ。兄等が取るべき道は兄等が敗北を耻づるにもあらず、校友の冷淡なるを怒るにもあらず、靜に潜んで力を養ふにあるのみ。微小なりと雖も吾雜誌部は兄等を送るに熱誠にして兄等を迎ふるに冷淡なるが如き非同情的輕薄兒にあらざることを記せよ。一言以て南下隊の勞を謝す。

雜誌部委員

西語曰天助自助者益自助者立身之基而處世之要道也人苟無自助之精神則學無成焉業無遂焉然自助之精神者非以一朝一夕之功而可涵養者也自少時不啻自理一身之務進則爲父母長上不厭煩不辭勞歲月之久習慣成性而始可得之矣方今文運隆興學徒日增焉然志行卑弱各避勞就佚知役人而不知自役甚則以勞役爲士人可耻之事焉故去校出世之時有左支右梧而受人之嗤詆輕侮者放慢亂惰而誤其身者亦不尠也要因不涵養自助之精神矣頃日生徒監來告曰曩者信州之學生相謀設寄宿所焉方其轉居之時自挽車運器物及往來數回無勞辱之色焉又曰彼等以修身爲講學之本而自洒掃應對至米鹽薪水之事各自服其勞役平居暇日無優柔軟弱之態互誘掖提撕以砥勵志行焉嗚呼當放肆浮華滔々爲俗之時踐履之厚如斯矣非有自助之精神則焉得能之哉余喜不能禁乃書所思而贈之以爲諸子祈天助云爾

明治三十九年十二月

第四高等學校長 吉村寅太郎

北辰會雜誌第四十七號

論說

體育小言

鬼川老夫

近來世間に體育と云ふ聲が大分喧しく爲つて來て、下は小學校より上は高等の學校に至るまで學則に定めたる體操科の外に盛に諸種の遊戲や武術を練修する様に爲つたのは、教育界の爲め否一般國民の爲めに誠に結構な事であつて、老夫も常に大に悦んで居るのである。去りながら是れは學校だけの事であつて、一般の人民に於ては遊戲體操は學校兒童の爲すべきものであつて大人の爲べきものでない極め込んで居る様であるから、今之を英國人や米國人が貴賤男女の區別なく一般に體育に心を用ゐて居るのに比べて見ると實に耻かしくて堪へられぬ。併し是れは我が國の文明が更に大に上進して總ての人々が銘々に身心の發達と健全とを計り、常に其の品位を高めることに心を用ゆる様に成つて來た曉でなければ到底望むべからざる事と明らめるより外に仕方がないのである。

故に今日の處は先づ學校體育の改善發達を工夫する事が最も肝要である。何せなれば、現今に於

ける學校體育の有様は、其の技術に於ては或は中々に進歩したるものもあつて大に賞讃すべきであるか、概して之を観るに體操運動は單に身體を強健ならしむる爲めのみと思ひ、遊戲運動は唯慰みの爲めのみと思ふて、體育なるものゝ眞の目的を解して行つて居る人が少ないから、體操でも遊戲でも往々軌道を外れ、之れが爲めに生ずる所の弊害が決して少なくないのである。今試みに其の重なるもの二三を舉げて見れば、只無暗に運動するが爲めに肺病や心臟病の如き不治の病を起すもあり、學問に不勉強と爲るもあり、放縱奢肆に流れ遂には墮落の淵に陥るもあり、學友間の親睦を破り互に仇敵の思を爲すに至るもあり、殊に彼の學校間の試合の如きは元來大に學生間の交際を廣め各々其の品位を高むるの方便と爲すべき筈なるに、只管其の技藝に勝ち誇らんとのみ心掛くるが爲めなるか、時として卑劣狡猾なる手段を廻らして喧嘩の種を蒔き、學校同志久しく互に相反目するに至れる様な情ない話を耳にする事が時々ある。亦幸にして競技が無事平穩に終る時は懇親會とか、慰勞會とかの美名の下に酒宴を張り、亂飲暴食甚しきは如何はしき下劣の遊を爲すものさへもある様子である。

次ぎに運動家其れ自身に於ても人に依ては大に迷惑する事があるさうじや、其れは「撰手に選ばれる事である、一度撰手に選ばれたら是非とも引受けなければ仲間の同情を失ひ、平生の修學に差支を生ずるから嫌々ながら引受くる事になる、而して一旦引受けたら最後、仲間に対して重き責任が生じて来るから學問はそつち退けにして其の技術を一生懸命に練習する、そこで競争には見事勝を占めて仲間の賞讃を博し一時大なる名譽を荷ふ事もある、處が其の名譽を荷ふのは東か

の間であつて直ちに學校の試験競争が始まると、此度は落第して非常なる不名譽を荷ふ者もあると云ふ事だ。又是れは十四五年も昔の語であつて現今の有様は何か知らぬが、東京の或る高等の學校で毎年四月頃になると端艇の競争を盛に行ふ事になつて居つたが、其の撰手は前年の十二月までに定まつて居て、一月からは向島に下宿して毎日練習する、此の練習期間は食物其の他の日用品は仲間より供給する事と爲つて居るが、餘程嚴重なる規則があつて、恰も競馬の競争前に於るか如く起居飲食も自儘にならず、養生を専らとするなり。又學校にも出る事が出来ぬから、日々の稽古は仲間同志が助くると云つて講義の筆記を始め、すべての稽古を立派に爲て呉れる、學校の方に於ても其の事情を能く知つて居て卒業の時には無事に證書を與ふるのが例であつた。故に卒業したと云ふ点に於ては他の生徒と異なる所はない様だが、さて世の中の仕事に取掛つてから何事にも通して居らぬか爲めに、終に一身の方向を誤つた者が少なくなかつたと云ふことである。

擊劍や柔道の大會に於ては各學校警察署監獄などより撰手を出して試合せしむるのが例と爲つて居るが、其の試合の有様を視るのに往々其の態度の野卑なるものがあつて柔道の試合は恰も市井の若者が賭相撲を取るが如く、擊劍は輕業師の觀セ物の如くにして禮もなければ法もなく、甚しきは此の糞とか馬鹿野郎とかの惡言を吐く者さへある、又其の應援者は或は拍手喝采し、或は大聲批評し、或は對手者を罵言讒謗し、或は審判者に抗議する事もあると云ふことだか畢竟するに平素指導其の道を得るに起因するのであらうけれども、誠に慨歎の至ではあるまいか。武士道

なるものは定めて陰で泣て居るであらう。

又年々中學以上で行ふ所の陸上運動會の如きも今日の流弊は大に矯めなくてはならぬ、此等の運動會は競技運動か主であるの乎又は御祭騒きをして世間の婦女子を引寄せ茶菓を進めて其の歡心を買ふのを以て快樂とするのが主であるの乎、頓と分らぬ様な事もある。又此等の運動會には中々大仕掛の事を爲るが、随分費用が入る、此の費用も運動上有益の事に使ふならば止むを得ないのであるが、多くは運動に關係せぬ事に使ふ様子であるから學資の少ない人々には誠に氣の毒の至である、都會の地ではまたく甚だしい悪い事が行はれて居る處もある様だ、それは觀客に勸めて菓子や、ビールや、カッヒーや、煙草や、其他の品物を高價で買て貰ふのである、又一昨年頃より紀念繪葉書が頗る流行して觀客を大に困らせたと云ふ話もある、而して其の賣代金を以て當日の費用に充て、甚だしきは酒食の代と爲すものもあると云ふ事だ。學校事業の爲めとか慈善事業の爲めとか云ふのならはまだしもであるが、自分達の費用の爲め殊に酒食の費用の爲めに觀客に強て品物を賣付けるとあつては其の心情の卑劣さ加減呆れかへつて仕舞ふじやないか。此等の弊害を一々算へ立つればまだく澤山あるが先づ之れ位にして置かう。

さてそこで我か北辰校に於ては今日まで以上述べ來つた様な弊害は餘り多くは見かけぬ様ではあるが、世間の流行の勢と云ふものは實に恐しいものであつていつ何時其の餘波を蒙む様な事がないとも限らぬのである。故に武術でも遊戲でも之を行ふ人々に於ては體育の本義即ち體育と云ふものは獨り身體を強健にする爲めばかりでなく、精神をも鍛鍊すべきものであつて、自己の

品位を高むるが爲めに行ふものであると云ふことを深く肝に銘じて居て、常に禮義廉耻信愛勇氣忍耐等の諸徳を重んじ、少しにても士君子たる者の體面を汚かさぬ様に心掛けねばならぬのである。唯此の心掛けがあつてこそ勝て驕らず侮らず負て怖れず怨まずと云ふ所謂武士道の極處に達することが出来るのである。

現今我か國に於ては體育を獎勵することが最も急務であるのに教育家其の他先覺者であつて之を鼓吹する人が割合に少ないのみならず、却て之を擯斥する傾きがあるのは何う云ふ譯であらうか。多分は未だ體育の利益を見るに至らずして既に其の弊害の多きを見た爲めではあるまいか、若しも果してそうであるとすれば今日武藝や遊戲を行つて居る人々の責任は實に輕からぬ次第であるからして、各自大に戒慎して諸種の弊害を除去することに力を致し、體育界をして高尚潔白のものと爲なくてはならぬ。左も無ければ世間の同情を得ることも出來ず隨て體育界の隆盛を期することも六ヶ敷であらう。

コーデリヤ論一節

た、り、

フォルスト、イムパルスは神の聲であるとはめたたへられて居る、マローの言葉でシエキスピ
ーヤが引用した、Who ever loved, that loved not at first sight? も、此二大詩人が此フォルスト、

イムプレッションをはめたゝへて居るのである、しかも、フオルスト、イムプレッションは往々人を欺くことがある、一目見て直ちによいと思ふ人は全くよいこともあらうが、一見してよいと思はぬ人が案外よくつた経験は誰れにも多からう、人は見かけによらぬもの、甚しきは、人を見たら泥棒と思へど云へる諺は度々此等の経験をなめた人が警戒の爲めに云ひ出して多くの人が賛成して云ひふらしたものであらう、デ、クインセーが困厄をきわめた流浪の後ちロンドンからイートンの方へ旅行した途中此種類の経験を述べて居る、乗合馬車の二階に乗りながら居睡りして馬車のゆれる度毎に隣り客にぶつかつた、こんな時には誰れでも迷惑するものだが此人は普通以上上不機嫌でデクインセーに小言を云ふた、もしデ、クインセーが下りるか此合客が下りて仕舞つたらデクインセーの方で怒り易い氣味の悪い人位に思つたであらう、ところが此際デクインセーの方でそれから睡らぬやうに注意すること、自分に病氣のあることを述べて謝したところが先方の見知らぬ人が自分を母の子に對する注意と親切を以て抱きかゝへて保護せるを見出したことを其懺悔録に述べて居る、實際デクインセーが云ふ通り人間には禮儀と云ふ幕ありて人間の善惡を全くかくして居る、其幕の引かれたとき、たとへば落ちぶれて袖に涙のかゝるとき、年寒ふして松柏の後凋を知るべきとき、こんな時の來らざるうちは人の善惡はわかるものでない、善人と見ゆるもの必ずしも善人でなく惡人と見ゆるもの必ず惡人でないことがある、

否、そのみではない、世の中にはすねものありて更に極端なるやり方に出づるものがある、世

の中には善人顔をする惡人多く看板に偽り多い世の中であると云ふのに激して之れを逆さに行くのである、即ち惡人の皮をかむる善人があるのである、たとへば下着を惡くして上着を立派にすると云ふ衣服のつけ方に反して一番下に一番よいのを着ると云ふすねたやり方である、世間は看板もよい正味もあると云ふのを珍重する、看板はよいが正味はそれ程にないのを當り前と心得て居る、看板は惡いが正味はよいと云ふのはあるものでないから、看板すら惡い正味は如何に惡からうと速断する、此世間と看板だけよきものと看板の惡きものを最もよく代表するものを、リア王、其二人の娘ゴネリル、レーガン及び其最後の娘コーデリヤとする、コーデリヤの其父王を愛すること其二人の姉の到底及ぶ處でない、しかも其二人が百方諛言を呈し巧言令色を逞ふし糞土を包むに錦繡を以てし正味の伴はざる美しき看板をかゝぐるに及んでコーデリヤはこれ等の看板と同じきをかゝぐるを拒むの反抗心にたえずして冷然として珠玉をつゝむに木綿風呂敷を以てし美しき正味に釣合はないまづき看板をかゝげた、此反抗心は善を愛すると共に惡を憎む心である、盲目千人の數に入るほどに老耄したリア王は嚇として怒りを發しここに悲劇の緒はつくられた、宋の何尙之と云ふ人吏部郎と云ふ高官について頗る時めいて居た、ある時老親を見んが爲めに歸省した、數百人の群集遠く彼を見送つた、其父何叔度「幾くの人汝を見送りしか」ときいた、何尙之「殆んど數百人」と答へた、父笑て「これ皆吏部郎の官職を送るもの、汝を送つたのではない、昔し段浩と云ふ人豫章と云ふ處へ歸つたときも數百人の見送り人あつたが、其官職を止められて流浪せしときに東陽と云ふ處より船に乗りて征虜亭と云ふ處に風を待つて數十日逗留せし

が新舊の知人一人も來りて見舞ふ人なかつた、汝も又然り、他日吏部郎の官職を止められなば又段浩の如くであらう」と云ふた、かくの如きは例を昔の支那に取るに及ばない、榮枯盛衰につれて門前市をなし或は雀羅を張ること古今東西凡俗の社會にありて通例の事である、コーデリヤの如き人あらば此數百人の群集に加はるを潔しとせずして、たゞ一人にて官職を失ふたる段浩を訪れたであらう、(ジェーン、エイアはコーデリヤに似たり、ジェーンは富み榮わたるロチエスターを捨てゝ不具盲目となつたロチエスターを撰んだ)、

城陽の太守梁柳は皇甫謐が從兄弟であつた、既に太守に任ぜられて官に赴くとき門出に或人皇甫謐にすゝめて「何ぞ出でゝ送らざる」と云ふ、皇甫謐答て「梁柳は初め布衣のとき我を訪ふても我更らに門より外へ送迎に出たることなし、食するにも鹽味蔬菜にて進むるを常とした、貧きものは酒肉を以て人に奉ずるは眞の禮ではない、ただあるに任せて心からの饗を道とするのである、然るに今梁柳俄かに太守となりて赴くに當りて我これに餞して送らばこれ城陽の太守を貴びて送る事に當りかへつて梁柳を賤むことに當る、古人の道義ではない、我心に安んじない」と云ふて遂に出でゝ送らなかつたと云ふことである、

自分はコーデリヤにも此梁柳にも全然同意するものではない、たゞ世の若きフォートインブラス達ちに「速斷するなかれ」と戒めたいのである、善人に見ゆるもの、或は善人なるべし、しかも惡人に見ゆるもの必ずしも惡人ではない、人生に興味を有するものは輝くものは悉く金ではなく貝殻のうちにも眞珠のひそめることを見るべきである、

文學と人格

其 月 生

シャーパー、ノールソン氏の「英文學研究法」を讀んで居たら、文學と人格とに就て論じた一章が、特に氣に入つたから、其の大意を紹介しやう。

吾人(著者)は既に、文學と美術、文學と言語、などに就て論じ去つたが、猶ほ「文學とは何ぞや」てふ問題の終結に達しては居らぬ。人格といふ事を論ずるに至つて、問題は茲に全く解決せらるるのである。

抑も如何なる作者といへども、自個の人格以外に脱出する事は出來ぬ。換言すれば、作者の人格にそれ／＼高下があればこそ、其の作品にもそれ／＼優劣があるといふものだ。能く引く語だが、ブツフォン氏の「文體は人なり」とは實に千古の名言である。ゲーテ翁も、人格が美術及び詩歌の凡てのものであるといふやうな事を白狀されてゐる。なほ此の事に就ては、多くの學者がたの多くの名説はあるが、恐らく、左に紹介する亞米利加の批評家(名はジョン、バーロース氏)程痛快に論じた方は無からう。

曰く、純文學を讀んで吾々が愉快を感じるのには、作者その人、即ち作者の性質、人格、觀察等を知り得るからである。勿論吾々は、作の内容のみを鑑賞する事も出来る。併し天才の書いた作には、どんな作にも、必ず作者自身の文體、人格が現はれてゐて、それが吾々を格別に喜ばしむる

のである。若し單に作の内容、即ち話の筋のみを知つて満足が出来るなら、何ぞ必ずしも文學を讀むの必要あらんや。文學と非文學との差は、只其の筋の現はし方如何に存するのである。見給へ、蜜蜂は花から蜂蜜を得るか。否、蜂蜜は蜜蜂から製出せらるゝ。花から得らるゝものは單に甘い汁に過ぎぬ。此の甘い汁を蜜蜂は彼等獨特の方法に配置し、之に蟻酸と稱する彼等自身の分泌液を加へ、茲に始めて蜂蜜が出来る。之と同じく、世間幾多の筋は、作者の人格に加味せられて、人を酔はする詩歌となるのだ。と

かくて天才ある作者は、神と等しく造物主である。彼は人事百般の材を探り、化して一新事實を編む。彼は物無き處に物を出し、人無き處に人を造る。而も其の人や、皆彼の人格の一部を具へて紙上に活躍して居る。云々

以下予の蛇足と知り給へ。

されば如何に美辭を探り、佳句を求めて、巧に之を排列するも、作者の人格てふ肝心なものが下劣であつては、決して讀者を感動せしむる事は出来ぬ。造花は如何に甘く出来てゐても何處か寂しく、京人形は如何程美麗に飾られてゐても活氣が乏しい。人格は龍の眼である。『野分』の道也を見てわかる。

然らば如何にして人格を向上すべきか。曰く修養！吾人は傑作を出さん爲めに、先づ人格の修養に勉めねばならぬ。

學界の危機

富田愛次郎

維新の鴻業は成り、西洋文明は滔々として我國に輸入せられしもよく咀嚼し吸収し、錯雜せる社會は漸く國民の意識により革新せられ大和民族建國の理想に歩を進め、已に二十世紀の曉天に於て世界の耳目を驚かし、寒梅の香氣は將に萬邦に馥郁として國民の技藝を以て摸倣なりと嘲笑せし外人は案外發明力の偉大なるに驚き、國民亦世界の盟主を以て自任する確信を有して、今後の文明は東半球の一角より流出せんとす。

然れども明暗の理は免るべからず、明なる事物の裏面には又必ずや陰影を投せざるを得ず、我學生界の趨勢は實に暗黒面に位するものなり、これに於てか當事者はこれが救済に焦心し、新紙は盛に警鐘をならして學生界を覺醒しつゝあり、これ實に國家の重大問題なればなり、否國家の死活問題なればなり。學生がその本務を没却して日に墮落しつゝある現象を世人は歐州文明の一暗流なりといひ、或は社會の罪なりとし、或はこれを教育者の責任とするが如しと雖も余輩はその根據を外部の影響にのみ求むるは大なる誤解にして學生の自己修養の不足に基因するものなりと信ず。

元來家族といひ、國家といひ、社會といふもその組成せる要素は個人にあり、如何に社會國家をして向上發達せしめんとするもその單位たるべき個人にして完全圓滿なる發達をとげずんば何等

施すべき術を知らざるなり。

彼等學生を瞥見するにその抱負の偉大如何にも頼もしげなるが如しと雖も道德的觀念、正確なる意志なきを以て一度逆境に立ち不如意の事に遭遇すればその粗笨なる直に失神し鬱悶し自らなす處を知らず、その極先哲か思索に思索を重ねて未だ到達し得ざる天地人生の深奥なる問題に勝手なる解決を與へんとし、果ては懷疑に陥り、明瞭なる頭腦の判斷を欠き、功名を以て頼むに足らずとし遂に身を殺すに至るものあり。世界の大事に洞察を加へず輕卒にも社會主義に眩暈して現代の社會を破滅せむと企つるもの頻々としてこれあり、何ぞ心事の陋劣淺慮なる惘然の情に堪へざるものあり。

莊辛の所謂、清風に乘じ颺々乎として高翔するも射者將に罾廬を修めて鱗繳を治して己を百仞の上に加へ、礪礪を破り、微繳を引き清風に折れて抔つるを知らず晝に江河に遊びて夕に鼎に調せらるゝ黃鵠の族のみ萍の類のみ。余輩は是等殘薄なる學生に對して先づ自己を修めよと告げむとす、これ偉大なる理想に到達する唯一の捷路なればなり。

彼のボストン市の脂蠟燭屋より身を起し、ワシントンと共に誠意赤心米國の旌旗を翻し英國より羈絆を脱して大鴻業を建て又電氣の一大發明をなして當時の學者をして顔色なからしめ、人類社會に没すべからざる貢獻をなせしフランクリンの生涯を見よ。彼の事業は偶然にはあらず、日常よく攝生、沈黙、秩序、決斷、經濟、勤勉、忠信、正義、清潔、沈靜、貞操、謙遜、の自己を修むる諸徳は彼の念頭を離れしことはあらざりしなり、而して彼の如き大抱負を實現し得たり、古來

の英雄と稱せられ豪傑と崇拜せられ人類社會に祝福を與へし人々は皆この心を藏せざりしはあらざりしなり。

教育當局者曰く「吾國の教育に待つ處の一般の形勢は早く間に合ふ人間を要求するのである、即ち技藝の人が賣口よくして人格あり、信賴するに足る人物は賣口が悪い、斯様に教育が物質的に流れては國家の發展上頗る憂ふべきである、教育の任務は事業をなす人物を作りて供給するものである、予はこの見地よりして最もよく實技に熟練すると共に人格亦備はりて世に處して信賴するに足る人物を養成するを以て目的とするのである云々」然りこの言や實に余輩の意を得たるものなり、如何に世はせち辛くとも麵包問題は如何に烈しくとも理性を蔑視し、只實利一遍を以て人生を葬り去らむとするが如きは人生に何等の意味を有せざるものなり。

苟も東洋諸國を扶翼する一大使命を有し、國家の存在を明にし、大國民の理想を發現せむとすれば先づ國民各自の修養に待たざるべからず、彼の西哲ヤングは余をして青年を見せしめよ我よくその國の將來を卜せんといへり、實に青年は國家の元氣なり、至寶なり、柱石なり、國家の經綸に任すべき世嗣なり、今にして青年學生の遊墮風をして一洗せずんば國家の運命や知るべし余輩がこれを以て學界の危機なりと絶呼する所以なり。

狂 夫 言

河 合 良 成

本誌論壇寂寥を極む。而して論壇は余の受持也、委員の責任上余自ら筆を執らざるべからず、狂夫言と云ふも敢て狂犬の月に嘯く如き意味にあらず、収むる所は「校風問題に關する余の私見」也。頃日來余は神經衰弱症に罹り、寧ろ神經衰弱夫言とすべきに至當さず。論旨文辭共に粗笨なる点は病氣に免じて乞ふ之を赦せ。

茲に一個の林檎あり、吾れ林檎を目して「この林檎熟せり腐らしむべからず」と云ふは林檎存すれば也、吾れ腐らしむべからずと云ふにあらすして林檎吾をして云はしむるのみ、林檎若し腐るを辭まざる余亦その防腐を主張するの必要を見ず。余が校風に對する態度實にかくの如し。

校風は余に於て存するも可也、存せざるも可也、余を主幹とし若しくは余を客幹として觀察せば校風の有無を論するが如きは殆んど無價値也、只茲に第四高等學校なる者存するが故に校風を唱ふ、四高若し是を欲せずば余は黙すべきのみ。

余をして暫く余等が校風問題に關する來歴を語らしめよ。

三十七年の秋なりき、世は萩の葉末に甘き夢を結び、人は万山飾る錦に樂しく酔ふ時、余等二百の青春は四高の園を排して闖入せり。見る者は上級生の温顔、聞くものは寮内を吹き渡る和樂の風調のみ、實に、余は當時の時習寮を指して花の時習寮と謳歌したり。然れども春夢徒らに覺め易く、覺めての時習寮は暗黒の時習寮なりき。温顔の上級生は俄然嫉妬の上級生となり、和樂の寮風は忽ちにして愁嘆の調と變せり。青き胡瓜が赤くなるのが世の習とは云ひながら此れ程まで

とは、余が當時に於ける感想なりき。かくの如き風潮は寄宿舎のみに止まらず、六百人以上より組織せられたる學校は宛然六百の群雄割據の様、各英雄の鼻の高きことよ、余は各人が鼻と鼻との衝突の爲めに嘸ど歩き苦きことならむと杞憂を抱きし一人なりき。中にも余が異様に感ぜしは、御江戸自慢は未しものこと、さすがは東都落武者の御隠場程ありて、帽子の白條を二本にするやら、得意になつて一高の寮歌を歌ふやら、北國の片隅金澤と云ふ町に一高の分校が内所で出来て居る事なりき。余は固より一高の校風を尊敬せざる者にあらず、然れども余は當時私に思ひたり。例へ石の下にもせよ、氷の裏にもせよ、余等が三年間修學の地（修學中にて最も大なる目的は人格の修養）と定められ且つ動くべからずと命ぜられたる地に於て、余等は何を苦しんで一高模倣に腐心するの必要ありや、苟も個性に自覺あらば一校にも相應の自覺あらまほしき者也。美しく云へば箱の中に金魚が游いで居る様に、悪く云へば糞壺に蛆虫が湧いて居る様に、雜然として机を並べるのみにして、何等統一も主義もなき學校は殆んど一の圓跡を形成せりとは稱すべからず。一顧せよ、高等學校時代は余等の性格に鮮明なる彩色を與ふる時代ならずや、余等若し暗黒の中に生活せば黒色の性格を有せざるべからず、糞へ切りぬ學校に生活せば生温き薄青き性格を有せざるべからず、糞壺の中に生活せば臭氣ある黄色の性格を有せざるべからず、統一なき主義なき學風に養成せられなば吾人は莖弱とならざるべからず、海月とならざるべからず、又智識のみを米俵を積み重ねし如くに腦の一部に貯ふるは學校の目的とする所ならざるべし、米俵は食らはずば必ず腐敗せむのみ。智識も此を咀嚼し活用せずば却つて吾人を害はむ。此の意味に於て智識の

支配者たる人格の須要ならざるべからず、人格は強健を尊ぶ、強健なる氣風は一方猛烈なる意思の人にあるには内面より此を修養するを得ると雖も、大多數なる風俗に向つては是を外界より壓迫せざるべからず。外界よりの壓迫とは善美なる校風也、強健なる學風也、若し夫れ現今の教育制度にして各人の人格修養に重きを置き別にはが方法手段に於て欠如する所なくば毫も生徒が自ら奮つて校風樹立を叫ぶの必要なしと雖も、現今の教育家は此の重大問題を生徒の自治に一任せるか、或は本末を辨ふるに暇なきか、何れにしても團練所屬の各員を驅りて自發的校風を樹立するの止むなきに至らしむるが如しと。

雖然たる四高を委細に觀察したる余等は先づその見果てたる學風に慨然たる者ありき、慨然の次に起るべきものは奮然と稱する形容詞を附すべきものならずや。試に見よ、新に移轉したる借家塵多からば誰れか箒を取りて是を掃除せざる者ぞ、箒を手になせざる人は非常に卓越せる人物にして塵芥を毫も意とせざる人か、若しくは箒を手にするを物憂しとする懶怠兒なるべし、余等固より超自然的人物にあらずせめては懶怠兒の誹を免れたしとは余等が分相應なる希望なりき。中には下男に命じて家を掃除せしめ晏然として坐敷に机を並べむとする人なきにあらざれど、余等はかゝる奸智を有せず。かくして校風問題生る。

爾來三年、余は雜誌に、演説に、あらゆる機會を捕捉し、時には機會を製造して北辰校の沈滞を痛論し、校風樹立の必要を鼓吹したりと信ず、憐むべし余の學業は何れへか飛び去れり、余が頭脳には一俵の時もなく、智識來らば食はむと盛に動かせる余が咀嚼器の音聲は、万人嘲罵の聲と

相和して異様に余の耳朶をうつ。あゝ失敗多き徑路なりけるよ。

嘗て余は金澤の土地の腐敗を唱へて六百頭腦に警戒を與へ、以て四高てふ排他的團結の強固を要求せしも、得たる所のものは直士藤井悌君の叱責、先輩篠原水衣君の問責、及び金澤人士の反感に過ぎざりき。

嘗て余は時習寮の消極的方針を嘲笑して其の發奮を切望して、而しかち得たる所の者は超然的思想を有せる寄宿舎君子の冷笑のみ。

嘗て余は北辰誌上軟文學の跋扈を戒め、青年墮落の第一歩は軟文學に心酔するにありと論じたるも、火粉は以外なる邊に飛び、彼岸の文學不可侵論にまで燃えつきしが最後、余が残し得たる所の者は文科三年及一部人士の頑強なる抵抗のみ。

嘗て余は校風發揚の第一歩は北辰會各部の活動にありとなし、事業擴張の必要條件たる會費の増加を提出せり、辛うじて其の目的を到達するを得しと雖も、尙ほ余が得たる最大なるものは欲しくもなき奸雄の汚名なりき。

嘗て余は運動部の實際的活動に盡竭せり、是の事件のみは幾分の効果を奏し、例へ敗れたるにもせよ關西の原野に一花咲かせしだけは事實なりき、而も余が個人として得たる所のものは幾多人士の蛇にも似たる邪推のみなりき。

嘗て余等は制裁を背後に置きて腐敗漢の征伐をやれり、一時其効果歴然として現はれ、腐敗漢はあけて屏息し、兢兢として恰も龜の首足を縮めたるが如き觀ありしと雖も、世の中は栗田がドロ

ツプを出す様に何時も甘く行くものにあらず、反動の聲四方に起り、私怨を挾む者、公憤を肩に着る者、自家防衛の必要より恐るゝ聲を出すもの等雜然として響應し、或は其の手段を咎め、或はその困難を論じ、或は平和の攪亂者なり、マキアベリの野心家なりと怒り、誹謗の毒矢さても、余等が胸に蝟集せしことよ。加ふるに機を見るに敏にして利を察するに速なる余等の同志は、余等が去れり。翻然として去りし彼等は翻々として反旗を翻せり、あゝ腐敗漢征伐によりて余等が得たるものは人生の輕薄共に談するに足らずてふ苦き經驗のみ。

始め余等が校風問題を唱へむとするや、余の最も恐れ、且つ最も多く豫期せしは個人主義を立脚地とする反對論者なりき。然り個人主義て眼鏡を通じて見れば校風問題の如きは實に三文の價値をも有せざる者也、余の所謂塵芥の中に平然として坐する牀の人物とはかくの如き人を云ふ也。かくる人士に向つては余は一矢相酬ゆるの勇すらなき者也、始めより甲を脱ぎ繩を首に懸けて降服せむ覺悟なりき、而して徐ろに余の腹心を吐露して之に謝述し、個人主義は場所のみを有するに止まらずして時間をも有するを論じ、時の觀念を有せざる理想的個人主義を以て發達の途上にある人生を律せざらむことを切願し以てその沈黙を乞はむと考へたり。

然るに意外意外、堂々たる四高六百人士てふかくる見解を持して余等が校風問題に喰つて掛らむとせし人士は一人もなかりき。あゝ見果てたるかな四高人士！幼稚なる余等はかくる見地に立てる敵なきを以て私に喜びを禁する能はざりき、四高人士中一人の具眼者なきを見て喜びしが如きは余等の耻づる所なりと雖も、余等と雖も徒らに頭を下げて謝するよりも頭を下げるを好むも

のなれば也。然れども是れ余等が第一に遭遇したる大失敗なりき、何となれば堂々として個人主義を提げて攻め来る大勇猛者は余等が敵にあらずして余等が味方たるべき者なれば也。余等若し此の大勇猛者に敗るれば余等が校風問題は此を再び喋々するの要なきものなり、余等若し此の大勇猛者に勝たば大勇猛者は直ちに余等が後援者となり指導者となるべければ也。然れども不幸かかる猛烈なる意思を以て現はれたる具眼者は一人もなかりき、なきを幸として余等は前進せり、かくして外は變幻常なき曖昧なる敵を四方に受け、内は戦闘に習はざる武夫の足並常に亂れ易くかくして校風問題は暫しその影を潜めたり。

四圍の小敵とは何ぞ。個人主義以外の小さな論據を持して陰に陽に、前より後より、余等に蝟集したる小勇猛者若しくば大小怯懦者を云ふ。或者は余等の手段を攻撃したり、特に制裁の種類に關して云々したり。然り余等粗暴なりと雖も豈に手段に向つて注意する所ならむや、余等は好んでマキアベリー主義を執るものにあらず、固より余等の取りし制裁方法が時に或は常規を逸し幾分荒治療の傾向を帯びたる者なきにあらざるべし。然れども荒治療をなす場合に二様の別あるを知らざるべからず。

第一は効果の多きを欲し、他の方法を捨て、荒治療をなすを云ふ、例へば外科醫が内科醫の肺癆治療法を問だるしとなして腐蝕せる肺臓を切り去るが如し、此の場合に於て勿論内科醫の治療法の望みなしと云ふにあらず、鋭刀を以て肺を切るはたゞ効果の顯然たるを欲したるのみ、マキアベリー主義と稱する者は實に是也。

第二は外に施すべき術なくして止むを得ず、荒治療をなす場合を云ふ、例へば彈丸が股に入りたる場合に於て、生命を取り止めむ爲め一足を切り去るが如きを云ふ、此の場合は股を去らば生命覺束なし、即ち止むを得ざるに出てたりと云ふべし。

若し余等が取りたる制裁方法にして、粗暴に流れたる者ありとせば、是れ恐らく止むを得ざるに、出でたるべし。吾校に禁酒令あり、然れども茲に一友ありて衰弱の爲め卒倒せりとせば余は禁酒の禁を犯して一杯の赤酒を口に注ぐものなり。反對論者は手段にのみ注目して、場合を毫も考察せざる也、或る一個の禁令は未來永久禁令たるものにあらず、亦いかなる場合に於ても禁令たるものにあらず、例へ凡ての場合に於て禁令たりとするも尙ほ此の禁令を犯して大なる目的を得ざるべからざる止むを得ざるの場合なきにあらず。その手段の理想的ならざるを咎めて毫も場合を眼中に置かざるは賢なりと云ふべからず。

或者は余等の人格を非難せり。余等は固より神にあらず佛にあらず、必ずや多大の欠点を有せむ。然り余等の人格は低かりき、かくの如き不完全なる余等が自己を鞭つに先んじて他を鞭たむと試み、業々しくも校風問題などと稱する旗幟を翻して高らかに制裁を叫びしが如きは實に余等の大失敗にして他が呼んで以て潜越となすは亦故ありと云ふべし、余は此の点に關しては今更赧顏の外なき也。明鏡も其裏を照さずとかや、況んや余等の如き録々瓦礫に等しき者いかで自己を見るの明あらむや。人格の一点實に余の慚愧に堪へざる所、余が今や日夜心を苦しめ、氣を痛ましめ、醫士が以て神經衰弱症なりとなすに至りしもの亦實に此の慚愧の念に外ならざる也。

然れども一考せよ、個性には二方面存す、自己を鞭つて人格を高むるは是れ内面的修養とも稱すべく、主義の爲めに働きて理想を實現するは是れ外面的修養とも稱すべし。此二方面に於ける時の關係は前者完成して必しも後者此れに伴ふべきにあらず、前者後者相並進するも妨けなき也、何となれば人生は限りあるを以て人は永久的に働くべきと同時に現世的にも働くべきからず、人格の鞭撻の如きは難事中最難事にして此を完美し得し人は古來殆んど屈指に足らざるべし。かくの如き人のみ主義の爲めに働くを得とせば、世界に於ける場所時間存在の否定を前提とせざるべからず、何となればかくの哲人の有する主義は宇宙を吞吐し、過去未來の區劃を去り、純然たる無終美に生活せむとする者なれば也。かくの如き高遠深大なる主義は此を論外とせざるべからず、苟も余等が生けるを自覺し又死すべきを認めなば余等は前二修養と並進せしむべきは固より論を待たざるべし、故に余等は多少の人格上の欠点を有すとも尙ほ主義の爲めに働くを得るもの也、固より其の欠点の多少は程度問題にして此は事實に就いて論すべき也。

余等同志が足並亂れたるとは何ぞや。曰く人生到る所に輕薄の風吹かざるはなく、堂々として校風革新問題を提げし同志の中にすら、此の風に吹き飛ばされしものありと云ふのみ。秋來らば天下の樹木凡て紅葉せざるはなし、例へ山間の森深くも隠れ、松の木蔭、岩の後、屹然と立てる櫨の枝も亦紅葉せざるの理あらむや、万物凡て然り、余は今更人世輕薄兒の多きを嘆ずる程愚にあらず。いかに鐵甲を被るとも、いかに頑強なる主義を以て鍍金するとも、人間は人間以上たる能はず、輕薄風吹き荒んで翻々として飛び去りしが如きは毫も怪むに足らず。男子の一諾千金より

も重しといはよくも言ひたるもの哉、男子の然諾を金錢を以て數ふる位の古人なるを以て、その子孫に男子の然諾を屁とも思はぬ快活兒の生するが如きは尤も至極と稱すべし。余は校風問題に一時は心血を注ぎながら、奮然として輕薄風に吹き倒されたる幾多人士の健在を祈る、而して兄等が風に從ふて行く所、到る所に名利山の如くに堆高からむことを切望す。何となれば風に乘じて名利を求むるは現世に最も廣く行はれたる尊ぶべき人生觀なれば也。

あゝかくの如くにして所謂校風問題なる者も内外の憂患に堪へ兼ねて全く瓦解し終れり、果然中山氏が所謂一陣の風と化し去れり。聞けよ風と化するも理なきにあらざる也、何となれば該問題を提げて立ちし同志は凡て熱烈の士なりき、熱烈は自己を燃やさずば止まず、憐むべき猛士は殆んど燃え果て灰燼と化し終れり、偶々吹き來るは秋風にあらずや、輕薄風にあらずや、飛ぶよ飛ぶよ、灰の樣よ、美しき灰！輕き灰！さても幸多き灰よ！

余は慥に信じたり、至誠天地を動かすべしと、余等は不肖至誠を有する能はずとするも余等に相應なる熱誠を提げて校風問題に當らば萬難立ろに破るを得べしと、あゝ淺はかなりけるよ、熱誠の行く所道生すべしとは愚も亦極まれると云ふべし、世の人は凡て地藏菩薩の如くに正直なりと思ひしは返すくも余等が世間を知らざる過失なりき。余等は少くとも熱誠を提げて立てり、猛然として立てり、眼中未だ名譽、野心、かくの如き觀念の浮ぶべき寸暇毫もあるなし、固より聖人にあらざる余等には名譽心なし、野心なしなど美しきこのみを衍はざるべし。然れども余等が校風問題に臨みしときは校規の不振に慨然たる者存せしのみにして、未だ邪念の萌すべき暇あ

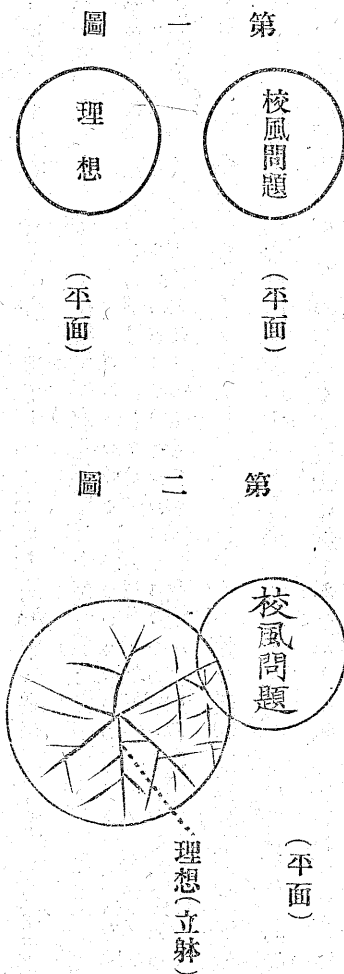
らざりしなり。而も外界の評論はいかに、余を以て無賴の徒を糾合して自己の威を張らむ爲めに校風問題を擔ぎ出す者とせり、余を以てマキアベリーの奸雄と稱し、目的の爲めに手段を擇ばず、校風發揚の名のみにして却つて全校の平和を攪亂する亂暴者と見做せり。あゝ世を讀み人を讀まざりしは慥に余の手落なりしと雖も余をして今や、人は凡て嫉妬深きもの、蛇蝎の如きもの、世は到る所陷穽のあるもの、荆棘の生するものて偏見を抱かしむるに至りしは又外界の罪と云ふべき也。誠に至誠は天地を動かすを得べし、されどかくの如き至誠は神秘的至誠ならざるべからず。余等が有する熱誠の如きは至誠と相去る百万里、濱の眞砂の千々に碎けたるの類なるべし。眞の至誠の發現は万代を期して待つべく、現代に於てあながちに此を求めむとするは誤れり。あゝされど蛇を見ず荆を見ず、青空にのみ憧れつゝも、熱誠は美しき花の咲くもの、正直は句しき實のなる者と思ひし過去の思想はさても無邪氣なりけることよ。

然れども余等不肖と雖も、豈非難攻撃を恐れて峻巡する怯夫ならむや。余等は尚ほ幾多の鐵心石腸の同志を有す。余等は瘡せたりと雖も尚ほ石を打てば鏘然として聲を發すべき鐵拳を有す。余等は枯れたりと雖も衰へたりと雖も尚ほ胸中二月の花よりも紅なる鮮血の遡るあり。余等魯鈍なりと雖も風伯を驅りて再來するに足る猛烈なる意思を有す。然れども余等は暫し校風問題より手を引きたり。詳かに云はゞ本學年の前半を以て盛に校風發揚を叫びたりと雖も其後半は靜に退いて亦是れを喋々せざりき。余は少しく其故を明にせむ。

校風問題と余の理想とはいかなる關係を有するや。換言すれば校風問題は余が主義理想に對して

いかなる位置を持するや。圓と圓とが相合する關係なりや、又は相交る關係なりや、又は相交はらざる關係なりや、果た又平面と平面との關係なりや、立軸と平面との關係なりや。少しく之を説かむ

余は四高に入る、慨然として校風刷新を叫ぶ。唱ふるものは固より余なりと雖も余は余の爲めに唱ふるものにあらす四校の爲めに唱ふるのみ。故に余の個性が四高の犠牲となるは余の欲せざる所なると同時に四高の校風が余の犠牲となるは余の亦喜はざる所也。而して余の理想は固より余の個性に宿り校風問題は固より余の個性以外に存するを以て該問題は余の理想内容と何等共通の点を有せず即ち圓と圓とが相交はらざるの關係なり(第二)然れども余の理想内容は元來は平面的



性質を帶ふるものなりと雖も、之を委細に論すれば理想内容は又幾多の枝葉を有すべし、かくの如き幾多の枝葉は時に或は外界を對象として動靜するを以て根原たる理想内容と自ら立軸的關係を生ぜざるを得ず。即ち理想内容を廣義に解すれば平面にあらずして立軸なり。恰も一枚の糸卷きに赤白各種の糸を纏きし如きものは是れ理想の内容の形態なりとす。是に於て余は再び校風問題對余の理想を考ふるときは第一圖の如き關係を生ずべし、即ち立軸と平面、球と圓との交又是也。校風問題は余が理想本質とは何等相關する所なしと雖も理想が各種の主義として現はるゝや其の枝葉は茲に始めて校風問題と接觸するに至りしなり、即ち理想對該問題の關係は全然間接的性質を有す、故に余は校風問題の有無によりて余が理想本質に何等打撃を受けるあるなし。此れを具體的に説明すれば校風問題とは余が理想より生じたる一主義、即ち強健なる氣風は學生に須要なりて理想の一枝葉上に咲ける花に過ぎず、否な花の上に結べる露に過ぎず、否な露の上に宿れる月影に過ぎず、否な寧ろ月にあるてふ鬼の餅搗に過ぎざるべし。四高若し此を欲せざれば余は斷じて之を唱へず、欲すれば唱ふるも可也、唱へざるも可也、唱ふるも唱へざるも余等が勝手也。余の校風問題を唱ふるに先ち余は四高その者が果して校風を希望するや希望せざるやを知らざりき。然れども希望するやせざるやは校風問題を提出したる後にあらざれば此を知ることを得ざると思ひたるを以て余等は先づ大呼して校風問題を擔き出したり。而も校論は之を以て狂と叫び愚と呼び、自己の身軀を拗められつゝも毫も痛感を覺ゆることなく、却つて他人の問題に對する如き態度を示せり。昔しさる繪師は自己の家の燃ゆるを見て喜んで畫帖を擲げたりとは聞けど、自

己の頭上に加はれる覺醒の大槌を吾關せず焉として濟し切つたる顔付を以て迎へる大膽さ、今の世には珍しき例と稱すべきか。兎も角も余等が熱誠を以て云ひ出でたる校風刷新の聲は冷淡なる態度乃至は僻みたる罵言嘲笑を以て迎へられしだけは事實なりき。余等は此の態度此の痛罵を見て、かゝる舉動こそ眞に校風を叫ぶに至る所以なれ、敵が發する痛罵の聲は此れ却つて余等が主張の必須なる理由にあらざるやとなし、極力其の冷刻なる態度を責めて、學校一致事に當らむことを願ひたりき。然れども石の如き冷たき人は更に進んで氷と冷え、ナイフの如きに小さき痛罵は更に鋸の如き恐ろしき武器と化し、針の如き鋭き嘲笑は五寸釘の如き驚くべき呪咀と變じ、余等に對する攻撃は校風問題より一轉して人格に及び、私行に及び、余等が小身又容るゝに地なからむとせり。是に於て余等は感じたり、四高之を欲せざるに尙ほ校風を唱ふべき必要ありやと。固より余等は熱誠を以て事を始めしと雖も校風問題が余等の生命にあらざる限り、理想と同一物ならざる限り、余等は飽くまでも我を張りて笑を後世に招くを欲せざる也。四高此を欲し余等又之を欲して唱へたる校風問題ならむには余等は飽くまでも戰ふべしと雖も、四高此を欲せざれば余等は靜に退くべきのみ、退いて時を待つべきのみ、其の中に余等校を去らば余等の後輩によりて余等が主義を行はしむべきのみ。余等はかく思考したるを以て靜に校風問題を衣の裏に隠せり、たゞ隠せしのみ、斷じて消滅せしにはあらざる也。

されど「一粒の麥地に落ちずば」……あゝ北辰校の沈滞する年亦久しい哉、近來やゝ活氣を生じたりと雖も、强健なる學風は未だ樹立せられたりとも見えず、生徒の氣風概して懦弱にして沈

鬱、未だ日光の味を知らざる日蔭植物の如き觀あり。青年は血に燃ゆべき也、眼光は希望に輝かざるべからず、例へ外之を顯はさずとも内心鬱勃なる英氣を貯へざるべからず。是を音聲に喻へむか、余は大地を根棒にて叩く如き音を最も愛す、次に鐘の如く中空虛あるも外の堅牢なる者の音を愛す、大鼓の音の如きは余のあまり好まざる所也、然るに何ぞや我四高の音聲は恰も破大鼓の音なきが如し、叩くも音を發せず叩かざれば固より鳴らず、而も中をのぞけば空茫にして無一物亦驚くに價せずや。あゝ校風問題の前途望めば望む程遼遠なる哉。

されど「一粒の麥地に落ちずば」……あゝ余等は期機を見るなく、己を顧みるなく無鐵砲にも校風問題を擔き出せり。云はゞ雨と戦ひ雷に劫されつゝも校風問題の種蒔をなせしなり。固より權兵衛のなす事なれば鳥の啄むは勢の免るべからざる所なりと雖、一粒の種尙ほ存するありて、後來寒暄宜しきを得て發芽し、花を開き實を結ぶあらば余等の鐵面皮なる暴舉も亦其の罪の幾分を償ふを得べきか。

校風問題は斷じて一二年の姑息なる問題にあらざる也、余等は辛うして種子を蒔きしと雖も、又腐蝕するの憂なしとせず、發芽することなくば又蒔けよ、蒔くときは雷鳴もあるべし、暴風も來るべし、然れども簑笠に身を固めつゝ蒔けよ、若夫れ猛獸來りて汝を喰はむとせば太刀を翳すも可也、銃を向くるも可也、空拳を以て之を搏つ尙ほ妙なるべし。

余等が蒔きし種子は梅か櫻か、麥か稻か余等之を知らず、梅ならば其の花と實とを愛せよ、櫻ならば其の花に憧れよ、若夫れ麥稻ならむには食ふて汝の飢を滿せ、とは雖も此を咀嚼するを忘る

るなけれ。余等が蒔きし種子、畑に落ちしか、道に落ちしか、岩蔭に埋れしか、荆棘の中に隠れしか、余等之を知らず、畑ならば之を愛育せよ、道ならば牛馬希くば踏む勿れ、若夫れ岩蔭荆棘の中に生じて人目に觸るゝなくんば靜に生育せよ、余は路傍に生じて馬に喰はれたる木槿を悲しむ、深山の奥に發芽したる余等が紀念樹よ、美しく花咲けよ、麗しく實を結べ、人來らずとも人に折らるゝを欲する勿れ、鳥も遊ばむ、蝶も戯れむ、何ぞ戀々として浮世に漂ふを要せむ、靜に咲いて實りて知己を千載に待て。



雜 錄

滿韓瞥見記 (續)

(滿州の部)

入 江 生

八月九日、今日は一日大連の市中見物である。朝食も勿々に、棧橋に下りて見ると、只もう、山出しのボット出が銀座の真中に立つたやうなもので、どちらを見ても、只「デカイもんぢやない」と呆れる計りである、五六ヶ條の鐵道は棧橋の突端まで引かれて、其兩側には何千噸といふ大汽船がズラリと舷を横へて居る、彼處此處には大規模の起重機が据ゑつけられて、半裸体の支那人は荷物の積卸に馳せ廻つてボンヤリ立つて居ると突き飛ばされさうなので、倉皇てゝ棧橋を陸の方へ向つて行つた。

棧橋の基部には停車場があつて、露國式倉庫が幾つとなく棟を併べて居るのが見るからに氣持がよい、大通路の入口の處には數十臺の二頭馬車——といへば立派だが馭者は無論一種異様の臭を放つ例の支那人で、車は露人の置土産である——が丁度内地の停車場の人力車のやうにズラリと併んで切りと客を呼んで居る。棧橋突當りの東廣場から第一停車場を通り過ぎて、寺内通を一直線に、行當りの南廣場の日本橋詰に出ると、之れは大連市内目貫の場所、此橋が元の露西亞町

と支那町との境界になつて居るので、橋の真中に立つて眺めると、一方には高壯な歐州式建物が、ヌク／＼聳わて居るし。一方には、セ、コ、マ、シ、東洋式家屋がギツ、シリ建ち併んで居て、其對照が非常に面白い、こゝらを見ると大連の町は確かに世界的に出来て居ると思つた。先づ日本橋を南へ渡つて、所謂東洋式大連市街に向ふと、家は小さいが、往來は非常に廣い、大山通、伊勢町、信濃町と、蜘蛛の巣のやうに分れて居る町割を縫つて行くと西公園といふのに出た、此公園は一名虎公園とも稱するので、彼の日露戦争の當時、大連の市中で日本の女を噛み殺したといふ有名な大虎は此公園の中にある檻の中に嘯いて居る。檻の横の掛茶屋の店前に小さな虫のやうなものゝアルコール漬になつたものを賣つて居るので、立ち寄つて聞いて見ると、之れが所謂蝸で彼の「蛇蝎の如く」といはるゝ怖ろしい毒虫であるとの事、此虫は滿州至る所に見出されるので、此後奉天の廟の中で捕へた人が我々の仲間にあつた位である、一疋二十五錢といふ正札附であつた。公園の中をあちこち彷徨うて居る内に晝近くなつて大分空腹を感じたので再び町に出て、何か旨さうなものと、探して居る處へ、フト眼についたのは、東京庵といふそばやの紅提灯、金澤のそれと思ひ出されて何となくつかしい氣がしたので、入つて食つて見ると實に案外の旨さで、朝鮮以來の珍味、大連に此そばありとは些か豫想以外のお馳走であつた。

晝食後は、そばに力を得て、更に露西亞町の見物に出かけた、流石に露西亞が十數年の計畫に成つたものだけあつて家屋建築の壯大高麗なる、道路の平坦廣快なる、大連の價は此建築物だけでも實に僅少ではあるまいと感じた。露西亞町の中央に北公園といふのがあるが、之れは前の虎

公園に比べると至つて小さいが樹木から其他の風致が總て自然的であるのは日谷野の人工公園なぞと違つて嬉しい。

夜は虎公園の傍にある支那劇場の見物に出かけた、夕食は勿論例の東京庵、劇場の名は「利慶茶園」と稱するので、入口にて例の得意の紅紙で「嘉賓屏止、紫氣東來」なごゝ御世辭が書いてある、支那人に導かれて中に入つて見ると、土間でも棧敷でも席はお好次第で、一つの卓を六客宛にあて、ラムネ、茶、桃、林檎、水瓜の種、煙草等が卓上に處狭しと併べられて客の取るに任せてある、舞臺は例の朱塗の九柱を四本、土俵場のやうに建てたもので、幕もなければ綴帳も見えない。始まる前に番附が配られたのを見ると、藝題を掲げてそれに一々筋書を記してあるのであるが、無論、漢字計り併べてあるので之れを読むだけでも容易なことでない、こゝに一同首を集めて漢文の研究會が始まるといふ滑稽を演じた。其内に、チャルメラ、鼓弓笛、太鼓のドンチャン騒ぎと共に第一幕が始まつた、藝題は、「丁香割肉而孝母」といふので、其筋は、何でも三人の娘を持つた老母が其内の一人を惡んで之れを責檻したが、其實此一人は大の親孝行で他の二人は母親に諂ひて居て、實は至極の横着者であつたのであるらしい、で、會々老母が重病に罹つた時、此孝心の娘は、己の臀肉を裂き取つて、藥に和して母に與へたので、母の病は立所に癒へて、ここに始めて其孝心に感じて、深く前非を悔い、前に孝娘を讒した二人の娘を大に責めたといふ話である、筋も單純であるし仕艸も一向簡單なもので、悲しい時はワイ／＼手放しで聲をあげて泣きわめき、怒つた時には足をあげてボン／＼蹴るばかり、たまけに其鳴物の惡喧しさは實に堪つ

たものでない。此外「西廂記」とか、「獨占花魁」とかいふのがあつたが、只喧しいばかりで一向面白くない。開演中は例の支那の名物湯手拭を一人／＼に配るので、一日の遊覧に汗とまみれた顔や手足を熱い湯で拭ふ心持は又格別である、此点は確かに、支那劇場の氣の利いた所であろう。九時半頃此處を出て、市中の湯屋へ行つた、湯銭は七錢、船中の潮風呂のニチャ／＼に馴れた身には命が延びるやうであつた。十一時頃本船に歸つて、宿泊、支那芝居のドンチャンがまだ耳に残つて暫らくは眠られなかつた。

現今大連にある邦人は六千人以上、尤も其内で、營業者は六百名他は使用人、(内婦人四百人)で、之れに軍人軍屬を併せば、優に三萬以上の日本人が在留して居るといふことである、之れから先大連の發達は實に目覺しいものであらうと思はれた。

八月十日、今日は滿州汽車旅行の門出、愈々大連を發して深く内地に入り込むのかと思へば、愉快は極まりない。午前中は携帯す可き荷物や、船内留守中の整理などに費し、午後二時日本橋北詰の中央停車場に行くと、我々を乗せて北に走るべき列車は早プラットホームに待受けて居る。團體のことであるから乗車は無論貨物車で、軍隊輸送の當時馬を乗せたアノ種の車である。下にはカマス、を敷いて其上にアンペラを横たへ、之れに銘々持合せの手布を敷き併べて其上に各々トツカど胡坐を組んだ様は反つて狭苦しい客車よりも都合がよい位である、窓と言つては例の馬がよく首を出して居た四隅の小穴が四つだけ、其代り中央の一間許りは兩側とも全くの開けっ放しで、落ちないように繩を十重二十重に張りつめた体裁は全く動物園の熊のようである。一つの

車に十六人詰、之れでも中々窮屈で寢る時は、まるで手も足も出せない位であるが、兵士は戰時之れに四十詰であつたとか、當時の苦しさが想ひやられるのである。

やがて、汽笛一鳴、萬歳の聲に送られて、汽車が動き出すと、其動搖の激しき、到底内地のガタ馬車どころの騒ぎでない、之れは貨車の悲しさに、車輛にバネがない爲めで、縦横上下、左右前後にゴトゴト、ガタガタ揺られて一時間程の進行の後にて早頭痛がすると言ひ出した者が二三人あつた位である。

戸口に端坐して沿道を見るとさすがは大陸だけに、見渡さるゝは、茫々限りなき平野ばかりで、處々雜草の丘陵が起伏して例の高梁は至る所に茂つて居る、草原の上には其處此處に牛馬の牧場が設けられて、牧童の支那人はボンヤリ立つて珍しさうに我々を見送つて居るなど内地に居ては夢にも見られない圖である。線路は殆んど一直線で内地のレールのやうには曲折の少ないのは最も心持がよい、殊に、さすが大陸であると感じたことは沿道に墜道の無いことで、大連から奉天、奉天から旅順に至る長道程に一つも出會はなかつたことで、杉津柳が瀬あたりの眼に馴れた我々には最も異な思ひがしたのである。要するに、沿道の景は凡て無趣味で到底内地のやうに、山を登り、墜道をくゞり、河を渡り海に臨むといふやうな變化が、認められないので、すぐ觀景に飽きて仕舞つた。

夜になると、薄暗い安全燈が二個天井にともされた、日中の暑さが激しい反比例に、夜は、毛布を被なければ寒い位であるので、戸を締め切つて横になると、車の動搖で体がゆられて眠ると

ころではない、漸く空氣枕を、鉢巻でグツとしめつけた頭にめてゝウト／＼とする内に、「サア起き給へ、營口だよ」の聲に呼び起されて外を見ると、成程こゝは早、營口停車場で、旭日はキラ／＼と遼河の流れを射て、濁つた水が眞赤になつて見える。

八月十一日 營口停車場に着いたのが午前六時十分、一行車を下り、洗面所に行つて嗽をし、顔を洗つた。此邊の井水は至つて不良で、良水は石油灌一個に十錢から二十錢までするといふことである、嗽の水と顔を洗ふ水は各手掬に一杯宛、其れ以上を使ふことは絶対に禁せられてゐる。やがて洗面が終わると兵卒に案内せられ兵站部の食堂に入つて食事を済ました、例の箱飯の臭いのも之れを食はねばならずと觀念して食ふと左程にも思はれない、人は境遇に由つて各々満足して行けるものだ。食事が終つて遼河の岸に出ると、早、小蒸氣船が、我々を乗せて營口の市街に向ふ可く待つて居るので、之に乗つて濁流滔々たる遼河の流れを下つた、河幅は左程廣いと言ふ程にも見えないが水が至つて深い事は何百噸ともあるやうな大きな汽船が奥深く入つて碇泊して居るのでも知られる。

町に上つて、先づ營口商業學校といふに休憩、之れから營口の銀座通とも言はるべき永喜街といふ大通を通つて、老爺廟街にある粵東會館といふ處で、純粹の支那菓子の御馳走に預つた。此永喜街を経て粵東會館に至る間が營口市で商業の最も盛な處で、道幅が狭く人家の間口が廣く入口には例の金箔張りの種々の彫刻を施した大看板を各自に掲げて客を呼んで居る。其外内地の所謂縁日商人なるものが日中至る處の街道に小さな露店を出して我々を見かけては頻りに愛嬌を

振りまいて居る。面白半分店の中に入つて團扇や古道具や、支那靴などをヒヤカして見ると、随分無鐵砲な價をつけて驚かすので、或限度まではすぐにまけて仕舞ふのであるか其代り結着の所まで價をつけると其以上はどう言つても承知せずグ／＼言ふ内に、ドシ／＼品物を片附けて其客には振り向きもせず又他の客を呼ぶのである。之等の商賣振は内地の日本商人が、客の去つて出て行くあとから追掛けて「それぢや御負け致します」といふやうな未練がましいやり方と全く反對、商業政策としては何れを取るへきかは別として、兎に角之等は支那人の商的頑固の性質を代表して居るやうである。斯くの如く營口は商業の活潑なる点では大連の比でない、之れは往來が狭く、小賣店の櫛比して居るからでもあらうが、營口の大連と相併んで此地方商權の覇者たる所以も亦此邊にあるのであらうと思つた。

「營口に行たら必ず豆粕豆油の製造所の見物を怠るな」と大連の支那通に教へられたので、どある製造所に入つて其状況を見物した、豆油の製法は現今新舊兩法を併用して居るので、舊法は牛を用ひて豆を臼で引いて細かくして之れを壓搾して油を出すのである、壓搾法は粉のやうになつた豆粒を幾重にも積み重ねて其上からクサビ、仕掛の材木を大きな槌で打込むので、全裸体一揮もして居ない支那人が其逞しい筋の張つた腕に大槌をベン／＼振り廻す有様は實に壯觀である。此法は新法に比して勞力を多く費やす代りに多量の油を製し得るといふことである。新法は總て歐米式の器械仕掛けで、壓搾法も總て普通の壓搾器を用ゐるのであるから、勞力が省けて之れも成績は悪からず、通常大豆一斗六升四合を以て油五斤豆粕一枚を製し得るとか。豆粕豆油は營口

の最も重要な産物で前者の産額は一ヶ年約五百萬枚、後者の産額は殆んど二百五十萬斤に上るといふことである。

停車場への歸途は陸路を取つた、此間の交通機關は、土工車である。一車の乗員四人、苦夫が之れを押すので四邊の景色を眺めながら、ゴロ／＼とレールの上を靜かに走つて行くの快は亦格別である、余りの面白さに中には炎天の中を態々二度も之れに乗つて往復した人があつた位。かう云ふ簡便な交通機關は内地でも處々にあつてよいものであると思はれた。

停車場に歸ると、我々の列車は前の儘。プラットホームに待つて居るのですぐに飛び乗つて、ホツと一息ついて互に顔を見合はせると、塵にまみれ、日に焼かれた額からはタラ／＼と汗が流れて、内地を出た時は天晴れの好男子を氣取つて居たハイカラもからもう、台無しで、誰れも彼れも馬賊の仲間入をしさうな顔附。時に午後六時。

午後六時半營口を發した列車は一旦大石橋へ逆戻り、奥軍の戰跡盤龍山、牛莊逆襲の跡、皆夕靄の裡に展望することが出来た。

八月十二日、仙金塞の停車場に着いた。炭坑所在地は驛からホンの五六町、其大煙突はすぐ目の前に聳ゐて居る。先づ坑區に導かれて材料係事務所前の廣場に集合して、採炭班からの朝食と、熊本製の朝鮮飴とに舌鼓を打ち、頓て大八木技師の講話が開かれた、氏の談話の要点は。

此煤田は昨年三月十日に開かれたので、炭量は仙金塞で十分の五、老虎臺で十分の二、ヨウハイ堡で十分の三の割合である。

普通に此炭坑を撫順炭坑と呼ぶのであるが、實は撫順は此處から一里程も離れて居るので、ツマリ一帯の煤田を呼ぶに地方主要の名を用ゐたたけのことである。炭層の長さは小瓢屯に始まり、東營盤まで約三十里厚さ百三十五尺幅半里許り、北方に傾斜しつゝ渾河まで連續して居る。炭坑の發見時代は、先づ八百年以上千年位と見てもよからう、其後繼續して盛に掘出されたのが、乾隆帝の時、一切の採掘を嚴禁したといふことである。舊時此炭を採掘して居た目的は、高麗燒製造の爲めで、今も尙此邊に其破片を發見することがある。然るに此八九年前、或支那人が不圖再採掘を始め奉天將軍も之を獎勵して居つたが、引續き北清事件に當つて、露國が其採掘權を奪ふに至つた、が由來露國の採炭術は尤も拙劣で、我技術に比して遙かに幼稚であつたから其施設としては殆んど見るに足るものがない。斯くて目露の役の結果我占領に歸し、昨年十月に至つて千五百噸を出し、引續き採掘に従事しつゝあるのであるが、或事情の爲めに、少々敷く採掘することが出来ない。石炭が出ないのではない、石炭を出さないのである。

講話終つて、坑内の參觀を許されたので、五六人の同志と共に、或坑内に入つて見た。坑内にはカンテラを持つた坑夫が案内して呉れたので、斜下の方に進んで行くと、十間許りで、もう眞暗、薄暗いカンテラが凄く足下を照して一種ゾツとするやうな冷氣と濕氣とが、身を引締めるやうに迫つて、心地の惡さなどへやうがない。坑夫は黙つて先に立て行くので、こちらも黙つて、後からついて行く「一体石炭は、どの邊からあるのです」と問ふと「石炭？之れは石炭の中を通つて居るのですよ」言はれて始めて四邊を見廻はすと、成程上も下も、右も左も石炭の層である。二

三丁も奥に進んだと思ふ頃に坑道は早平坦になつて、あたりには鋤で採取した石炭の塊がゴロ／＼して居るので、坑夫に頼んで、其内で最も質のよい處の塊を一個紀念の爲めに貰つて、尙奥深く入らうとしたが、時計を出してカンテラの光にすかして見ると、早、大分時間が経つたので、瀛車に後れては大變と引返して坑外に出た。

要するに撫順の大炭坑は其設備未だよく整つて居らず、滿韓の大鑛山地といふ豫想に比しては些か案外の感がした。然し、此鑛山が前に大八木技師の述べた如く有望のものであるとすれば、將來に於ける發展の程度は殆んど計る可からざるもので、若し此事業が成功せば慥かに日本の一大財源となることであらう。

仙金塞驛を發車したのは午前十一時、李石塞、深井子と逆戻り、蘇家屯、分岐点を経て、奉天驛に着したのは午後四時頃。

奉天は我々の今度の最後の目的地である、と思へば何とも云へない快感に打たれた、一同の顔を見渡すと之れも皆嬉しさにイン／＼荷物を片附けて、口の中で頻りに万歳々々を唱へて居る人もある。やがて導かれて停車場裏手の守備隊の宿舍に分宿した、之れは露兵の置き土置で煉瓦でたゞんだ不恰好な巖丈造り、何疊とも一寸分らん位廣いアンペラ坐敷の居心持もよく、風通しもよく、炊事係の手際もよく、^{イレキ}容器こそバケツの蠻具なれ、豚、雞、高野豆腐、蒟蒻、葱、燒麩のめつた汁に澤庵の色のよい奴までつけた加減のよさ、一同唯もうホク／＼もので、此夕食は渡滿以來の大御馳走であつた、こゝに唯一つ閉口したことは蠅の多いことで、顔や手足に止るのならま

だしも、食物の上にウチ／＼たかるのは最心地悪いので、一人が食ふ間は一人が團扇で煽いで居ることにして漸く食事を済ますやうな始末である。飯を食つて先づそこに引廻した各自の毛布に横になりながら「大連のそばも旨かつたが之には及はない」とか「もう一邊「トロック」に乗つて見たい」とか「こうして寝たまゝどこへでも運んで呉れないかナ」などと勝手な太平樂を併べて居る處へ、守備隊の兵卒が「入江さんといふ方は御出でですか」としきりに呼んで居る。ハテ何だらうと思つて聞くと面會人かあるといふ、奉天に知つた人も無い筈だがと不思議に思ひながら出て見ると、小學校時代の友で今は此處の守備隊附少尉になつて居る男が來て居たのである、導かれてすぐその聯隊の兵舎に入つた、之れも露兵の殘し物で煉瓦造の宏壯な建物、到底内地のそれとは比較にならない。「守備隊生活も中々吞氣で面白いものだよ、夜中に獨りぼつちになつた時などは、折々内地の事を思ひ出さないこともないが、住めば都で、チャンコロ相手に威張つて歩くも愉快なものさ」とは此男の物語、成程此位の意氣が無ければとても、かゝる地に在つて業務に服することは出来まいと思つた。夜十時頃兵營を辭し着劍の兵卒に衛られて宿舍に歸つて見ると、一同もう夢の眞中。十幾日の船責め、瀛車責めに疲れ果てた身は、此夜を最も心地よく安樂に寝ついたのである。

(未完)

現代思潮瞥見

富田 愛人

諸君の多くは夏目氏の作物「野分」を讀みしならむ。その内に表れし白井道也は實に逆境の人なり、世は實利と化し人道は没却し去られ輕躁浮薄その風をなし溷濁たる潮流一世を風靡するを慨し、獨超然として俗流を蟬蛻して、短袴弊衣人道を説き主義を懷抱して一日の糧に窮し、妻は飢を訴ふるも快然微笑して毫も意に介せず、自己が戚さんと欲する處をなし、行はんと欲する處を行ひて悠々然たり。

彼の錦輝館に於ける一場の大演説こそ實に彼の生命なり、作者の苦心も想見するに難からず。彼先づ明治現代青年の地位を論じ更に理想に説き及びて曰く「理想は魂である、魂は形がないから明らない。只人の魂の行爲に發現する所を見て髣髴するに過ぎぬ、惜しむべき哉現代の青年はこれを髣髴する事が出来ぬ……西洋の理想に壓倒せられて眼がくらむ日本人である、西洋の奴隸である、奴隸を以て甘するのみならず、争つて奴隸たらんとするものに何等の理想が腦裏に醗酵し居る道理があらう」と青年に大鐵鎚を加へて最後に金力問題に至りて極論して曰く「金貨を煎じたつて下痢はとまらないであらう、十萬坪の別荘を市の東西南北に建てたから天下の學者を回ましたと思ふのは凌雲閣を作つたから仙人が恐れ入つたろうと考へる様なものだ……」と現代を嘲罵し、憤慨し縷々數千言聽衆をして聲無からしめぬ。誰が野分を讀みて道也に一滴の涙なからむや。

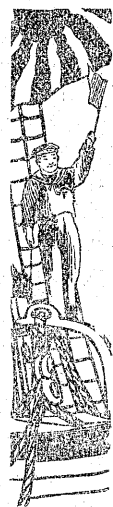
彼は世の流行兒にあざりし従て順境の人にはあざりし、社界の下層に彷徨し、世人は彼を目して狂人となし、馬鹿視せり然れども彼は主義の人なり、少くとも現代青年の理想を代表するの大人格を有せり、その我を持するや豪健不稜胸中晏然たり、時代の暗潮に乗じて順風に帆を揚げて走るこゝ能はず、寧ろこれに逆行せり、その品性の高潔掬すべきものあり。今の世主義あり主張あるもの道也の如く然らざるか、主義なく抱負なく啻だ盲從これ事として何邊に花咲くも知らざる萍の如きもの社會の上層に翱翔して得々たり、人道を保持するものは社界の下層に沈澱して、却つて低頭詭辯片々たるの小才士は順境に處して現代の思潮は道理を没却し去らんとするか。「パンを得るには主義は駄目だ」これ當今地位を得んとする者の金條なり茲に至りて余輩謂ふべきの語なし、斯くの如んば社界の活動は無意義にして小鳥の群居すると毫も撰ぶ處なきなり、人もし主義を捨て名利の間に驅馳して先輩の踵に附して盲動するが如くんば力の強きは老牛にしかず、その走るや驚馬に加かず、その飛ぶや黃雀にしかざるなり、憐むべき哉。

余輩は決して現代を呪はんとするものにあらず、又不吉なる言をなすものにもあらず、苟も社會の一員として存在する以上誰か文明を願はざらん、人類の幸福を企圖せざらん、社界の圓滿なる發達を期することに於て人後におつるものならむや、然れども余輩は現代の文明は物質精神兩界に於ける文明とは如何にしても見るこゝ不能也。なる程物質上の進歩は金世界といふべく今後數世紀には又金剛石金代を現出せん、精神方面にては如何退歩々々著しき退歩なり、世人は暗雲の下

を辿りつゝあり、精神上の墮落は社界の墮落所謂文明の退歩なり、人もし傀儡の如くんば知らず苟も靈氣存在する以上文明の程度を物質的を以て律し去らんとするは根本的誤解なり、少しく茲に省慮する處ありて可なり。

何れの時代と場所とを問はず文明の裏面には暗流の存在するは顯然たる事實にしてこれを全く清掃し去らんとするは不可能なり、而して吾人は或る程度までこれを容るゝの雅量が必要とすれども文明（世人の所謂文明）と正比例して罪惡の増加し風教道義日を遂ふて没却されつゝあるは不可思議なる現象なり、それ等の原因は多々なりと雖も人の處世困難を加へ適者生存の經濟上より覺むべきものあらむも自己の眞價を賣りてまで吾人は適當たらざるべからざるか余輩甚だこれを疑はざるを得ず。

時代の風潮は實に黒潮なり決して吾人の絶對的威服せらるべきものにあらざるなり、泰然として暗流の中に傑出して切嗟自ら疆くし決して時代の奴隸たるべきにあらざるなり、健全なる社界を建設して自己の本能を發揮し、大なる現在は大なる未來の準備なるを自覺し向上の一路に向つて猛進するは國家の柱石を以て任ずる現代青年の本領也。



文 苑

陸軍中佐中西君墓碣銘

村 上 函 峯

君諱俊豪。幼稱良吉。世爲加賀藩士。考諱保輝。母芝山氏。君其第三子也。本姓藤原。大野其氏。出承中西達人後。因冒其氏。明治十六年。入士官學校。修步兵科。卒業。任陸軍少尉。屬七聯隊。叙正八位。尋任中尉。叙從七位。二十七年。從征清役。大小十數戰。所向有功。進大尉。補中隊長。陞正七位。叙功五級。授金鵄勳章。叙勳六等。授瑞寶章。三十二年。補第五聯隊中隊長。轉第四旅團副官。叙勳五等。授瑞寶章。叙從六位。未幾任少佐。三十五年。轉三十五聯隊第一大隊長。三十七年三月。征俄役起。七月第九師團。自宇品航海赴柳樹屯。部署既定。二十六日。我軍向旅順。攻安子嶺。君率所部。攻凹字形山。連戰三日。遂克之。八月二十一日。我軍攻盤龍山。敵據險壘。礮銃齊發。勢甚猖獗。君受一戶旅團長命。屢出突擊。殺傷過當。會工兵投爆藥。破敵壘一角。君乘勢馳突。爭先奪關。遂陷東砲臺。君乃中彈而斃。年四十二。實二十二日也。初拔凹字形山。乃木大將授功狀。曰。凹字形山之險。爲安子嶺一帶鎖鑰。第三十五聯隊第一大隊。奮戰突擊拔之。遂使安子嶺敵敗退。是中西大隊長等。慶戰之功也。進中佐。叙功四級。授金鵄勳章。叙勳四

等授_レ旭日小綬章。君爲_レ人。眞摯剛果。克耐_レ艱楚。臨_レ事能斷。又能濟_レ急周_レ窮。愛_レ恤士卒。故部下樂_レ爲_レ之用。君娶_レ岩田氏。生_二男。長曰_レ豪。次曰_レ傑。女四人。十一月十四日。葬_レ遺骨於野田山兆域。頃者其兄阪井清君。持_レ狀來屬_二文於余。乃爲_レ之銘次。叙_レ其梗概。係以_レ銘曰。

第九師團。

世稱多士。

盤龍一戰。

惜哉多死。

君麾下下。

聽發虎吼。

君雖斃矣。

壘歸我有。

玆勒豐碑。

桑梓之丘。

忠魂毅魄。

庶其長留。

盾守る少女

(續)

靜池庵譯

王は其の後
寶石を取り
臣下に示し

王冠ゆ
許多の
宣はく、
光輝をぞ
發見しよ。
國の寶
物ならじ。

朕は此をもて
競技の賞に
九箇の寶石
競技の場に
腕の力も
且つは武を練り
何れは此の地
聞くも忌はし

年毎の
賭けま欲し。
九ヶ年の
益荒男の
試すべく
技を練り
占むべしと
異教徒を

千里の外に

拂ふべく!

是を最後と

王冠の

八年は過ぎぬ

勇ましき

正面に在りし

最と太き

八度の競技

打ち畢てぬ。

金剛石の

競技をぞ

八箇の 寶石

悉く

カメロットには

催さる。

ランスロットの

手に落ちつ。

頓て其の日も

近づけば

掛けても云はね

胸の中

(折しも病に

臥し給ふ)

ランスロットは

思ひける。

皇后に王は

問ひ給ふ、

領土の半を

價する

「あはれ可愛の

え行かずや?」

九箇の寶石

一ト時に

「左なり病し

重ければ!」

皇后の宮に

捧げてば

「さらば御身は

見で止まむ、

驕奢の心

動かでや。

御身が愛でし

勇まし

驕奢の心

動かでや。

御身が愛でし

勳功も!」

今し世界の

大市場

ランスロットの

物憂げに、

テームス河の

河岸に

皇后はいどや

佇みし

皇居し給ひし

アーサー王

王の側に

ランスロットを
情の露の

見上げけり、
眼ざしに！

情の露の

心に背き
「許させ給へ
古き手紙の
今なほ鞍に

宮の心を

眼ざしに
斯く讀みつ。

「行きそ止りね

王は警と
次に皇后を

我は斯くしも

我が側に
病みたれば！

抑もや我が愛

数々の
勝らでや？」

金剛石に

勝らでや？」

宮の心を

斯く讀みつ。

（よしや心は

しかすがに

豫て期したる

贈り物

金剛石を

数のまゝ

揃へず欲しど

思ひしが）

宮の心に

背かじど、

愛に忠義の

ランスロット

「見よ恥も無の

人々や！

京童

人の常。

行幸成るや

「あな恥がまし

などや御身は

晴の試合に

過半吾等が

そこらの武士や

口善惡なきぞ

皇后の宮、

ランスロット！

此の度の

出でまされぬ？

敵なる

出でまされぬ。

流し見つ

え堪へねば」

吾が君よ、
癒ねやらで

優しの王の
快樂せんとや

留主の間に
居残れる！」

「武勇の花の
優美の珠の

ランスロット！
ギニーバー」と

宮の心を

讀み損ね

王欺きし

ない腹に

ランスロットは

答へける、

歌に作りつ

歌人の

「賢しの宮よ！

などもかく

酒宴の筵に

ことほげば

賢しうおはす？

御情の

笑まして王は

抑も王の

初露われに

降りし夏

託言一言

宣ひし？

斯程賢しう

おはせしか？

あらず、御身の

此の日比

善惡無の人の

私語は

罪無の王の

慕はれて、

野面狹に唧く

こほろぎの

我が忠勤に

倦ませたる？」

鳴く音とだにも……………

武士の

我が忠勤に

倦ませたる？」

口には容易う

戸立てまし。

皇后は頬に

輕侮の

さはれ我が忠

我が愛を

微笑を浮べつ

「アーサー王！

に知らぬ人は

無きぞかし。

左なり罪無の

我が大君！

に知らぬ人は

無きぞかし。

圓滿無垢の

アーサー王！

遮莫誰ぞよく
目も灼然の

心安かれ

我がいたづらは
託言一言

今日しも稍に

それかと計り

微けき雲の

事あれかしと

王の心に

さらずば王は

人皆あると

誓言に今も

あはれ我が友

仰ぎ見る
太陽の光?

大君は

露知らで

宣はず。

疑へば

疑の

見わしのみ!

無頼漢

火や焚さし?

王の如と

武士の

酔ひませば!

ランスロット、

瑾瑕無の王には
瑕瑾いと多し

人は浮世の

傾く太陽にぞ

我は汝が我れ!

縁の絲の

さればよ汝聞け

晴の試合に

有るか無きかの

熟睡の夢を

蛇の羽音の

悪しと言れど

ランスロットは

「王欺さし

如何でおめく

我が爲めの
我が愛づる

人なれや。

雲の光彩!

大君と

繋ぐのみ!

我が詞——

行さねかし。

蚊の唸り

驚かし、

かしましや

整すものを!」

答へける、

今し、吾

カメロット

王の御前に

王は自身の

宛然神の

尊み給ふを!」

行かるべき?

言葉すら

御言ぞと

「さもこそ」と

「あせけなきと

徒らに

アーサー王、

缺きませば

失はせ!

人は云へ——

知るやがて

一ト突に

倒るぞ」と、

勇者なれ。

汝が御名を!

行さねかし。

ランスロット!

何時しかに

許してん、

勳功に。

我が大君、

勳功を

徳どこぞ

愛で給ふ。

歸りませ!」



和歌詠草

四高和歌會

早春厂光雜

其月

荒野行く闇のうつゝの狂女はも昔の胸の光たぐるか
春光に諏訪の氷のさゆらさぬ躍れ千尋の底のうろくづ
やゝゝに五尺の雪の今朝とけて萬年青の珠の三つこほれたる
峠道の道のかたはらむら消の雪をかづきて路の芽ぐめる
旅なから住めば都かかりかねも態と夜にして鳴くよ別れを
咲かんずる花を見すてゝかりかねの歸る心の健氣さ哀れ

あ、み、

若みどり小松の磯にさまゝの貝以て遊ぶ春の小波
なまじひに恵の春をうしとこそ雪積む里を慕ふ厂かね
嵐吹く雲間を洩れつ束の間をわなゝく星の光にも似し
珊瑚なる島は海路のはてにさへ浮ふと聞くを世はなびれたる
石橋の苔なめらかにさかしらの人はためらふ慈悲の里かな

皓月

消に殘る籬の雪のしら弓が矢と亂れたりもゆる若草
梅ちるや窓には琴の音のたねて臙夜渡る厂の聲哉
寂靜やねせ道心の光消えまた忘執の闇に追はるゝ
そゝろにも荒野に萌えて黄金の光をあふる莖に似たる
汐寄せば海の底なり磯貝は闇と光にたゝよへる哉

落水

峯は尙白雪深う春はたゝ若菜つむ子か袖に亂るゝ
夕靄は帆かげをこめて大空を厂渡るらし青柳の里
日影さす荊棘か針の白露はさゝかに空の榮をうつして
しら玉の固さに觸れし今日迄は風にこぼるゝ露と恐れぬ
薄月夜憂のまゝを冷人の神にかなづける竹生島哉

空白

霞より霞に入るや大河のどよむか如く春立つ日哉
夜舟行く淀を歸るやかしかねの聲さなからに旅夢にや入らん
あでやかに玉なす露のくだけては暗にさまよう森かげの草
坑深う闇に黄金を掘る人の恐れも知らず迷ふ頃哉

日に千度魔にたとかされ世一つの寶を守る衛士のつとめか

山の人

野の面はみ便なせる春風の跡の如くに電のとけたる
舟待つや湖つら暮れて比良は尙積む雪白う厂の歸へれる
わびしさや闇に一夜を泣く波の頭もたげて光を呼べる
御胸の黄金の鐘に曙の曲をならして闇を追ふ哉
いざなはれみ谷に遊ぶ白石は流れて千代を淵に沈める

を、し、

遠山は白衣をぬきてみごりなす裳を長く大野に引ける
流人行く灘波の浦の空高う雲心なくかりのかへれる
幾千代を闇になれてはなまなかに恵も仇か田鼠の身に
白き帆に思をのせて春風に光の口へ瑠璃の面を
とさく／＼に一つの靈は身二つにやとるか如くうつり住む哉

蘆葉

野末なり苔むす伏屋春淺み忍ふの車は轆たろして
落人は渡りもあへず花吹雪く志賀の浦和に厂を聞く哉
逍遙や胸の鏡は青柳にかゝる眞弓の月をうつして

上臈は梅津の里の春も見すあはたしけに嵯峨の奥へと
名工か涅槃のみ繪に手向する笛に梅ちる京の寺哉

彩虹

夕されば祈願の人は闇に消れて薫やさしき梅のみやしる
故郷を慕ひて厂は夜もすから旅寢の人を驚かしつゝ
黄金の槌か春のみ光は幾千尋なす氷河くすして
藪かけの細道分けて椿踏む墓參の人の多き春哉
一人居ばやさしき琴のつま音を聞くか如くに酔ふ心哉

松濤

早蕨はやさ手をあけて紫の指貫まねく小松原哉
夕鐘は湖に沈みて春雨のたえ間を渡る厂の一むれ
黒暗の魔性は曙の白箭なす光に消えて物の蘇生れる
慰めは誠のみつれしかすがに水面に消ゆる淡雪の如
今日一日一日守れはとこしへの勝ちとはかなく忍ひつる哉

湖風

佐保姫に貢する如早蕨は賣いたきて舞ひのほりたる
小燕は乙女姿に厂かねは隠者の様に雲井を渡る

あけぼのゝ神装束くや湖はみ鏡なして光り初たる
もゝちたひ葡萄の酒を仰くともかばかり何に人の酔ふかは
盲目なり心のまゝに低きへと流るゝ水を我か胸どこそ

月華

大江は遠く煙ふりて細やかに春の雨ふる花堤哉

かりそめの墨染かこつ花の夜をそゝろや厂の月に歸へれる

旅に逝く子は訪ひ寄りし御母を穢身ながらにみ光どこそ

あこがれば春の潮に黄金の鼓聞く如心のまへる

月の夜は天女の琴を島人の小波に聞く竹生島哉

春塘

ねばる夜や直衣に梅の香をこめて夜すがら迷ふ人も蓬ふ哉

春されはなへての憂きを羽につみてあゝ厂は行く冬の國へと

参籠やみあかし暗う魔のかげをする水晶の珠數に追ひつゝ

御母の病いたはる花の夜を園には月のうすかすみたる

あこかれや天女しきりに花ふらすみ園に一人歌誦する哉

花汀

大刀なるや簾の梅は武夫の血汐に浮きて漂へる哉

朧夜や里隠れたる人戀ひて月踏む人は厂におちたる
わびしさや光を奪ふ夕鐘はあこかれ人の胸に沈みぬ
三つなりきいまはの母は手をとりてたゞ苦しけに泣き給ひぬる
鶯は霞の幕に主して花の宴に酔ひ心地哉

秋水

よろこひに波は黄金の鼓なす旭を打ちて宴する哉

ひとむれは堅田の空をひとむれは志賀の浦わを歸る雁かね

大海の狂へる見えて束の間に夜見路をうつす宵の電

野分してごよみ戦く秋草の野面に似たる我か心哉

遠き世ゆ湖の底なる沈鐘のうなりに似たる身のもたえ哉

春三十句

秋 雨 山笑ふ 麓や自治の 模範村
山焼くこ 山人燈 ならしけり

森をぬけて 廣き牧場や 風光る

白挽いて 板倉殿の日 永かな

鶯や 籬落の梅の 散らなくに

狼の 嘘や日永の 羊飼ひ

縁遠き娘もちけり 針供養

京の蛙 浪花みに申く 日永哉

膝栗毛書くや一九が日永顔
 明日曇る空かと思ふ麗かに
 染て干す紅友禪やうらうらに
 防風を摘みてもぞゆく磯長閑
 野遊の田端の晝を曇りけり
 花の旅懷の金つきむ迄
 雁風呂や雄島の蟹が片底
 草餅や子が起きぬまの泣かぬまの
 縫ひ急ぐ衣や蛙の目かり時
 行く船の左舷に淡路朧かな
 松風か村雨か渚ねぼろかな
 壺焼の尻やくさらんころ火
 すまましう茅原萱原焼にけり
 山しうが格子祝や春の月
 春の水沿ふて流るゝ牧場かな
 桃日和島の祭の神樂哉
 曲水や延喜醍醐の御代の春

花の山醉其角みる今日もかな
 狐忠信
 鼓うては狐よりくる夜半の春
 尾山神社
 梅三株廣前寒き二月かな
 兼六園即景
 河北瀉見晴して立つや風光る
 梅あちこち蓄む前田家用地哉

四高俳句會席上即吟集

(一)

牡蠣舟や廊に近き橋の下 紫影
 牡蠣舟や浪花小橋の人通り 同
 牡蠣飯の湯氣に曇りぬ吊ランプ 同
 物越や末摘花の風邪聲に 同
 辛子漬鼻も通さぬ風邪かな 同

牡蠣舟に牡蠣のつくべき夜なりけり
 軍艦の牡蠣とる沖の鷗かな
 穂の下に南金とも牡蠣の云はぬ哉
 知る人やあると牡蠣舟窺きけり
 寄宿舎に枕並べて風邪かな
 上洛は風邪申して籠りけり
 牡蠣飯の下戸に酔牡蠣の上戸哉
 宿直人風邪の由を聞えけり
 横着の宵寢に風邪をひいたなんの
 宵風呂を危ぶむ風邪の心地かな
 牡蠣舟に河岸の新内聞く夜かな

(二)

静池 竿に綸に觸れなんとして 乙鳥
 同 風放たば雲へ入りねべし 同
 紅芙蓉 乙鳥湊一番の長者かな 秋雨
 同 橋上の車馬絡繹と燕かな 同
 同 燕三輪の茶店に巢ひけり 同
 同 初雷や夜の御殿に亥と奏す 同
 秋雨 春浅き菜園あさる雀かな 紅芙蓉
 同 乙鳥や家皆低き漁師町 同
 白水 春浅き水の行くへや梅名所 墨村
 同 一文字町引きかへす乙鳥かな 同
 同 春残し素足を伊達の白柏子 白水
 同 初雷の晝を木魚の遠音かな 同
 同 引きしぼる矢先を燕よぎりけり 同
 同 大江戸や富士低うして風 同
 同 徒らの髭晝きけり奴風 同
 静池 膳に落ちし海雲はさめどもく 紫影

(三)

磯の香に 故郷を思ふ 海雲哉	紫影	草庵の 酢に事を欠く 海雲哉	秋雨
陽炎や 草にすてたる 力石	同	蛇穴を 出て謀叛の 舌長し	同
陽炎や 片乾きする 濡瓦	同	陽炎や 海市みゆると 人ばかり	同
蛇いづる 穴に邊す 露の臺	同		
蛇いまだ 穴に江湖を 睥睨す	同	(四)	
逆まに 芽をふく 桑の さし木哉	同	目高に げて 蛙子 残る 掌	紫影
涅槃會や 燕の化粧 まだ成らず	同	揚土に 蛙子 乾く 哀れなり	同
陽炎や 口綱長き 馬の尻	同	流連の 尙居 心や 春の 雪	同
伯夷山に 入る日か 蛇は 穴を出づ	同	臨濟の 貧乏 寺や 木蓮花	同
末法の 世ぢやと 寢釋迦の 涙雨	白水	紫の 瓦研に さすや 春の 水	同
涅槃會に 参りて 婆の 頓死哉	同	野遊の 島原 ぬけて 戻りけり	同
蛇穴を 出れば 五濁 惡世かな	同	野遊や 襟元 寒き 春の 風	紅芙蓉
陽炎や 草に 下せる 負佛	同	木蓮に 看經の 鉦 聲えけり	同
陽炎や 豆こぼれたる 厩口	同	紫の かつぎの上や 春の 雪	同
磯に 寝れば 陽炎も ゆれ 鼻の 先	紅芙蓉	笹の葉に 朝二月の 雪 淺し	同
今さした 柳にとまる 雀かな	同	木蓮や 經机 すう 南窓	墨村
別莊や 海雲賣來る 勝手口	同	野遊の 伊達に もちたる 詩集哉	白水
		小硯に よき墨 薫る 宵の 春	同

寫經する 窓に日永し 木蓮花 同
足生へて 元服したり 蛙の子 同

(五)

陰口の あらぬ噂に 出代す 白水
稚子に 秘して 夜出代りぬ お乳の人 同
子雀に 飛んで 見せけり 親雀 同
子雀や 日永の庭の 鹽ぶせ 同
峰入や 吉野は 花の 浮れ人 同
出代りて 見様見真似や 都ぶり 秋雨
落柿舎の 軒に 巢立つよ 雀の子 同
親に 似て 舌な 切られど 雀の子 同
峰入や 篠懸に 落花 吹きどちよ 同
口開けて 腹空 顔や 雀の子 紅芙蓉
子雀の 飲食ふ程に 馴れにけり 同
峰入や 道心 堅き 御先達 同
出代や 初奉公の もの あはれ 同

(六)

蛤の 小さきを 雛の 籠物かな 紫影
目と口の 覺束な さよ 紙雛 同
煙管貝 多き 濕地や 三つ葉芹 同
莖太き 水菜の 株や 別れ霜 同
馬刀具の 細き 砂ふく 沙干かな 同
藤代の 松は 霞みて 沙干かな 秋雨
梨の花 暈きた 月を見る 夜かな 同
種床の 土の 崩れや 別れ霜 同
あるが 中に 亡き兒に 似たる 雛の 良 同
梨花の 月遠征の人 飯らざる 紅芙蓉
石に 据ゑし 萬年青の 鉢や 忘れ霜 同
山國の 人の 見に行く 沙干かな 同
菜の花の 道を出れば 沙干濱 白水
獨活掘りし 土の 凹や 忘れ霜 同
干からびし 鼠の 糞や 雛の 箱 同
摘み入るゝ 三つ葉も 少し 田螺籠 同
三つ葉洗ふ 欠摺鉢や 沈む 砂 同
梨の花に 此頃 曉の 夢 淡し 同

北辰時評

藤井悌君に答ふ

河合 良成

藤井君足下、南下問題の爲め雑誌發刊の機を得ず遷延茲に至りし罪は余の深く謝する處也。今や所謂金澤問題なる者は一人の之を喋々する者なしと雖も、求められたる答辭は暗黒の中に葬るを得ず、當時の草稿を出して是を誌上に掲ぐる所以也。

藤井君足下、余は今や眞情を吐露して足下の問責に答へむとす、願くば足下よ、足下が有する先入的感情の悉くを去れ、而して一個河合良成なる者の答辭を局外の位置より觀察せよ。

藤井君足下、余は實に幾多の敵を有す、然れども多くは是れ裏面の敵のみ、誦欺の敵のみ、裏面の敵は憎むべくして恐るべし。只一藤井悌君あり、旗鼓堂々として正面より押寄せ來る。あ

あ余は斯の如き堂々の敵を憎むものにあらずして却つて多大の尊敬を拂ふ者也、恐怖逡巡せむとするものにあらずして却つて雀躍するを禁じ能はざる者也。そは人は水にあらず、風にあらす、鞭撻を待ちて始めて進むを得なければ也。余は是の点に於て先づ足下に感謝せざるべからず。

藤井君足下、足下の人格、足下の慎重は世既に定論あり、而も余の不才不文遂に事を好まざるの足下を立たしめ堂々數万言の公開狀を送るの止むなきに至らしめしは、實に余の不徳驕慢の致す所、今や天下の同情靡然として足下に傾くの時余亦何をか辨するの要あらむや。然れども一寸の虫尙ほ五分の魂を有すとかや、不肖余の如きも一個の自覺を中心として回轉せる個性を有するを如何せむ。天下の同情非同情は余の關知する所にあらず、余は個性の命ずる所を告白

して以て是非を明かにせむとす、若夫足下の明察余の眞意の那邊に存するかを悟るを得ば幸甚。

藤井君足下、足下が非難要點は四十五號に於ける「金澤人士の偏狹」てふ評論及び同號所々に現はれたる余が金澤觀にある者の如し。余は少しく是を辨せむ。

北辰會誌は少くとも北辰校裡に起りたる問題を評論するを得、何となれば北辰會誌は北辰校の耳目となり、反射鏡となりて北辰校を誘掖すべき任を帯びたる者なれば也。されば是が編輯の任に當れる委員同人の如きも校裡に起れる公私の事件に注目し、批評者の態度を持して是を評論し是を批判するは當然の事に屬す。余が四五號雜報欄に於てなせし評論の如きも全然此の見地より出でたる者にして余は毫も森岡諸氏を辯護せむとせしものにあらず（文中却つて森岡

氏を攻撃せし句調ありしと覺ゆ）又金澤人士を誹謗せむとせしものにあらず、單に局外者として余の位置より余の信じたる處を陳せしのみ。次に金澤觀察者としての余の資格について一言せむ。足下は余を以て森岡氏と同視し二年許りの觀察を以て金澤の眞相を知るを得るかと嘲笑せり。是れ足下が余の經歷を知らざる無邪氣なる誤謬のみ。足下よ、余は半金澤人士也、余の郷里は金澤の地を去る六里なる福光也、福光は金澤を城下と仰ぐ小邑なり。加ふるに余の祖父は金澤に永住し、余の祖母は金澤土著の人也、而して余も亦幼時金澤に人となりき（家は宗叔町なりき）長じて後も暑中休暇の過半は必ず金澤の親戚に於て過せり、余と足下と何れかよく金澤を知れるかは大なる疑問なり、寧ろ余の觀察は正鵠を得たらむか、何となれば余は金澤を知ると同時に他の都邑にも生活したれば也。か

くの如き資格を有する余は金澤を委細に觀察して以て金澤を危険なる土地と思惟せり。而してその信する所を誌上に告白して新來者を戒めしのみ、何の不可か是れあらむや。

藤井君足下、余は足下の二非難點に關して大略陳述したりと信す、今や更に余をして一步を進ましめよ。足下の論する所一氣數萬言實に武夫槍を提げて陣頭に立つの風姿ありと雖も、未だ一言以て金澤の非腐敗を辯せしを聞かず。問題の根底は實に金澤の腐敗非腐敗に存するにあらずや、若し金澤が眞に腐敗せる者となれば足下等は毫も金澤市を辯護するの資格なく、強ひて腐敗を腐敗にあらずとなさば是れ虚偽也。余は足下の斷じて虚偽の人にあらざるを固信す、げにや足下が金澤の腐敗を打ち消さざるは正しく虚偽を蛇蝎の如くに憎める足下の人格の致す所なるべし。

足下よ、金澤市は果して腐敗せざるか、余は足下が敢て腐敗を辨せざるを利して金澤の腐敗を明言する者にあらす、余が金澤を腐敗せりとすは實に余が十數年來の觀察見聞に因るなり、勿論警察にあらざる余は他市と比していかなる程度に於て腐敗せるかは明言し難しと雖も、苟も余等が常識を有する以上は大略に於て其の結論の誤なきを信せむと欲す。現に余は余が知人間に於てすら幾多の好例を見たり、足下も亦多く見たる所ならむ、されば余が雜誌部の委員として新入生に對して警告を與へ、以て風塵の外に超脱せしめむと希ふ如きは甚だ當を得たるものにあらすや。

足下よ、愚者を指して愚者となさば愚者必ず怒らむ、然れども一顧せよ、愚者の怒るは愚者たる所以にあらずや、赤きを指して赤しとなすは是れ當然なり、赤きもの吾赤きにあらす青きな

りと云ふも人誰れか信せむ。腐敗せる所を以て腐敗せりとすに怒るものあらば是れ怒る者の罪也、かくの如き場合に於て識者の取るべき道は怒るにあらず、宜しく自己が果して腐敗せるやを熟慮し、若し三省の結果果して腐敗せりとなさば自ら改むべきのみ、若し果して腐敗せずとなさば、茲に始めてその腐敗せざる所以を論じて徐ろに非難者の罪に及ぶべし。余が金澤問題に對する希望は實に上述の如かりき、あゝ足下等が金澤を以て腐敗せすとすの勇を有し加ふるに足下等の云ふ所にして眞ならしめば余は實に肉胆荆を負ひて足下等が門に罪を謝せむのみ、否な足下等の鐵拳の下に斃るゝも可也、足下等が誹謗の毒矢に死するも可也。然るに足下等は毫も此の道を取るなく金澤市の何たるを論せずして直ちに非難者の問責に入る、蓋少しく輕舉に失せずや。

藤井君足下、加能同志會が問責委員を派して森岡氏の辯解を求む、森岡氏は此の時既に威壓せられたるにあらずや、若し森岡氏にして頑強なる硬骨子ならば即ち止まむ、苟も普通の人間ならむには必ず屈せむ、屈して謝せむ、あゝかくの如き壓迫は是を看過するを得べきか。固より森岡氏の言がいかなる根據によれるかは余は是を知らずと雖も苟もその言にして眞に近く、眞に近き言を縷述したる人が團體の壓迫によりて其言を取消したりとせば是れ果して黙過すべき善良なる事實なるか。あゝ足下よ斯の如き事實を默認せば後來北辰校の壇上に立つ人、誌上に筆を執る人は、その人勇者にあらずる限り、一言一句戰々兢兢として自己の意志を吐露するを得ざるべし、足下尙ほ森岡氏問責事件を以て言論部雜誌部に何等の影響する所なしとなすか。固より薄弱なる加能同志會の勢力を以て一個

森岡氏を壓迫せしが如きは、事件その者は毫も取るに足らずと雖も、余は言論部雜誌部の委員たる責任上金澤人士の行動を非難して以て其の備を作るの罪を戒めしのみ。

藤井君足下、余は尙ほ一言すべし、一日會の問題是也、某氏が一日會代表者たるの態度に出でたり云々は足下の既に自白せる所、而して勿皇一日會に向つて謝する所ありしと附言せり。然れどもかくの如き某氏の行動は謝した位にて取消し得べき性質の者にあらず、況んや單に一日會に謝せしのみにして森岡氏に對して何等謝せしを聞かず亦一言の局外者に向つてその誤謬を解きしを聞かず、依是觀是某氏が一日會の代表者として加能同志會の代表者と共に森岡氏に辯解を求めたるものと見るべきは理の當然と云ふべし。加ふるに余は當時一日會席上に於ける論評を聞けり、而も詳細に聞くを得たり。あゝ北

辰校の聲價の揚がらざるや久し、時としては尋中の輩の侮辱をさへ招かむとするにあらざるや、余は賢明なる加能同志會の或者が何の必要ありて校裡の問題を校外をも含有したる一日會に提出して、幾多の血氣者をして拳を固め、制裁を叫ばしめしかを慨し、向後かゝる輕舉を再演せざらむことを警告したるに過ぎず。

藤井君足下、尙ほ委細なる答辨を有すと雖も余が雜誌部及び言論部委員としての辯駁は畧々陳述せり、最後に一言すべきは余が個人としての答辨也、足下が「今特に足下の名を掲げて此を論するは金澤市の爲めに怒るものにあらずして足下の輕舉と傲慢とを責むる也」との言是也、あゝ此の眞率なる非難に對して余は何をか辯せむ。足下は余に勸むるに言論部雜誌部の委員を辭すべきを以てせり、然れども余の是に應ぜざるものは言論部雜誌部に對して引責すべき罪を

有せざれば也、然れども足下が一轉して余が個人の性格を非難せられたるの点は余の深く恥ぢとする所也。余は愚は愚なりと雖も自己の愚を知らざる程愚にあらず、過去三年の高等學校生活を顧みて余が輕舉余が傲慢に關しては赧顏の外一言の謝辭なき也。再言す足下は崇高なる人格を有す、足下は慎重の人也、此の直士に此の言を蒙る、余は心中ヒシシと釘うち込めるの思を禁ずる能はず。罵詈の聲雷とはためくも余は怖れず、万朶の銳拳頭上に降り下るも余は退かず、只獨り性格に關する非難は余の常に畏褶する所也。余は自白す、余の人格は完璧にあらず必ずや欠闕を有すべし、今や、畏友あり余を以て輕舉なり傲慢なりとなす、余亦何の辯辭かあらむ。

回顧す余は入學以來三年私情を擲つて校風革新に胸を潜めたり、偶々頃日來其の一端を具象す

るや世論喧々余の小身を容るゝに地なからむとす、今や余は野心の化身に偽善てふ美衣を纏ひて現はれたる夜叉の如くに見られたり、あゝ余は果して輕舉なりしか、傲慢なりしか、虎狼に等しき野心を抱藏せしか、余は或夜私に枕を蹴つて後園の流に自己の影を見むとしたりき、曉天靜に星を數へて心裡の平靜を屈指の中に求めむとしたりき、然れども遂に能はず、世論果して信すべきか、余は實に自己を評價すること能はず徒らに五里霧中に彷徨したりき。然るに今や足下の明指に會す、雲霧は飛散せり、果然余は輕舉なりき、余は傲慢なりき、何となれば足下は余を以て輕舉也傲慢也と叫び余は深く足下が謹直の士たるを知れば也。

あゝ足下よ、輕舉なる余が、傲慢なる余が、自己の愚昧を顧みずして東西に奔走し、動もすれば精神上の問題にすら容喙せむとせし罪は深く

余の謝する所也、足下の寛大よく余が謝する所を容るゝわらば余の幸甚是れに過ぎざる也、足下よ、余は後來人格の修養を勉めむ、他日余が完美せる人格を備へて足下に来るあらば足下よ乞ふ、足下の警告によりて覺醒したる一後輩として垂教する所あれ、妄言多罪、

暗流錄

(三月十日稿)

北風雪花を飛ばして満天暗憺たり、生あるものは息をとどめ、死せる者は姿を失ふ、大地はた寂として皓々の積雪あるのみ、かくて我か北辰會の諸部は一二を除くの外表面に於て、一切の生物と共に假死の境に入りぬ、基より尺蠖の一度ひ縮むは再ひ他の方面に伸ひんか爲めのみ、吾人これを憂へず、偏へに各部の再來を期待す、而して時は正に來たり、弱き早春の光

に積雪の消ゆるを待たず、萌え上る春草は曠野を染め、東風はすでに江南の一枝に音つれて薫香水の如く、靄霞は幕の如くにこゝ北越の天地をつゝみぬ、大鵬の翼を張り、鵠鴻の高く飛ぶ、蓋しこの機に勝るものあらざるべし、

○過去一期間の各方面の不振は事實なり、而して吾人は殊にこれを我か講話部に見る、北越の僻地に於て斯部の盛大を謀り振興を議するは至難中の至難なるものなり、吾人亦その窮地を思ふ、然れとも昨秋に於ける數度の目覺ましき講話に接して意を強ふしたる吾人は、今春未だ講演の何物をも聞かず、過ぎし歡ひは夢の如く、今の失望はやかて將來の變移を思ふて轉た恐怖の念に堪えさらしむ、吾人は切に期待す、花咲き鳥舞ふ陽春の季にも入らば、吾人か敬愛する名士の金城の地に遊ぶものなしとせず、而して機を逸せざる斯部の再ひよく吾人をして満足せ

いむる所あるべし

○曾ては洋々として前途の發展を思はしめし演説討論部の、此を過ぎし秋季の盛況に比して、吾人は世の變移の常に意外に出づるに驚かざるを得ず

○語學部に於ける各種の事業は差したる變化なく寧ろ各部の不振の間に立ちて松柏の操を示すを喜はざるを得ず

○國文會漢文會の現狀に付ては吾人實に言ふに忍びざるものあり、盛衰の如何を知らず吾人は今や、其の存在を疑ふ國文會の如きに到つては昨秋已來一度の開講も見ざりき、而して今や學年の過半を経ぬ、前途卜するに難からず、思ふに國語會漢文會の事業を論する前に吾人は國語漢文の兩課か如何なる意義を以て語學部の下に

存すかを知らず語學として日本語を學ひ漢文を習ふは寧ろ吾人に取つては一片の譖語なり、語學

部の下にこの兩會を有するは我か北辰會中最も奇怪にして尤も矛盾せる現象なり、吾人機を得ていさゝか云はんと欲するものはこれなり(空白)

二、

○回顧す過去壹年間に於て最も我か誌壇に於て興味ありしは校風問題なりとす、紅葉散り雪消え花飛ぶの今に到つて昔日の號叫やゝ寂莫の感なきを得ず、而も校風問題たるや、たゞに口舌の間に論議すべきにあらずして學校全体の實行問題たるを記せざるへからず、口議の間すでに區々の論戰あり、今や多くこれを口にするものなし、蓋し實踐の方面に於ける成否判するに難からざるなり

○思ふに校風發揚の至難なるや等しく識者の憂ふる所にして、豈一朝討論の後俄かにその功を期するを得べけんや。殊にかくの如くたゞ思想の問題のみにあらずして實踐の問題を含むもの

に於て然りとす

○然り水は依然として白く、山は舊の如く緑なり、多く波瀾はたゞ表面を軽く流るゝあるのみ、殊に我が校風問題を以て甚たしとす、試に思へ、

未だ斯間の校裡に湧かざるの日と、湧き漲りて而して後枯れたる今と、果して幾何の差違ありや、あゝ人力の微なる、辨と云はす文と云はす、其功果の至少なる吾人また驚かざるを得ず

○然れども再び熟慮せしめよ、堂々たる校風の解決は論理の法則を運用して得られたる斷案によりて得らるべきものならず、果た修辭の原則によりて感動されたる瞬時の憧憬にもあらず、たゞ至大なる人格の深遠なる感化あるのみ

○人格の感化や偉大なり深遠なり又自然なり、人格はこれ區々たる智識の法則を超越し紛々たる情緒の原則を蹂躪し、而も一切の智ある者を畏服せしめ一切の情熱ある者をして讚美せしむ、

人格はこれ一切を超越して而もよくこれを包含すればなり、見よ、釋迦は聰慧なる迦葉と雄辯の富樓那とを弟子とし、基督は敬虔のパウロと博識のヨハネとを有す

○教育最後の目的は人格の養成にありとは斯道最新の學說なりとか宜哉

○卑しくも大を北陸の一方に誇る我等が學府なり、何んぞこれを統べ之れを動かしてこれを教へこれを感じしむる人格のなからざらんや、個人に於ける人格の滅亡は同時に死を意味す、精神的結合の團體にして何ぞこれを結びこれを統ふる意志なからざらんや、意志はやがて人格なり、吾人は確信す、我等が學府は常に生きたり、而してこれを感化すべき人格の常に存在し、同時にこゝに潑刺として奮ふべからざる校風なる一靈氣の會てより存在し今尙益確かに存在せるを○吾人は屢々山村僻邑に老いて一種畏服すべき

人格を有する野老に遭遇す、彼等が青年の時代に於ける悲痛の狀より苦闘の果てに鍛ひたる人格なるか、果た雲行き水歸る自然の靈性に感銘して成れるか、將又温厚なる清新なる宗教的信念によりて組成せられたるかを知らずと雖も、殆んど都市に於ける名僧知識も及ばざるものあり、而してよし彼等は彼等の人格に自覺を有するとも、少くも吾人か云爲する如く明瞭なる自覺あるにあらず、權威の政客、劍光の將軍、千金の賈人のみならず、よく天地の至靈を讚美する詩人よりも、却つて自己の天分を知りて醇々乎として道を避邑の童兒に説く村夫子の至高なる天爵を持する事は曾て北米の作家に聞けり

○余は切に疑ふ、曾て唱道されし如く校風は沈滞し壤亂したりしや、否、其はたゞ自覺の点に於て薄きありしのみ、蓋し自覺は他を待つて始めて生ず若し我が校の周圍に於て同等のもの數

個あらは、自覺はすでに遠き己前に醒まされたるや必せり、然れども、我が校は北陸の避地に介在し、常に仔々とし學び獨り信する處を邁進せしと雖もその主義を自ら了解する点に於て、蓋し山間の野老に等しきものありき

○所謂我が校風の内容に到りては、吾人又大に云はんと欲するものあり、曾て論者あり、喋々と「生徒心得」の明文を朗讀し聲を枯らして而して後に我が校風はこれなりと、丁寧なる校風なる哉、然り吾人も亦肯す、死せる校風はそれと

○生ける校風の何たるかを知らんと欲せば、訓話考證の態度に出でずして、眞に生ける人格の感化を得て自己に四高生徒たるの自覺あらば、すべからく一切の空文を擲つて自己を觀よ、これ生ける校風の活躍して顯現せられたる處なればなり

○事余りに抽象なりとせば吾人は好んで卑近の一例を摘舉すべし、吾人は校に登るや常に靴を穿たざるべからず、而して吾人これを穿つ、こは最も多くより輕視さるゝ小事なりと雖も、而も堂々たる校風を伺ふに於て何等の欠陥あるなし、蓋し宇宙の大眞理は常に微少の物にも、髮髯としてその存在を示す、宜哉、一色一香無非中道の語や

○服裝の整備せるは一面に於て個人の威權を保ち、他面に於て他人に禮節を示す、堂に上つて業を受けるや元よりこの覺悟を要す、かくして吾人は我が校風は、他に於て見る如く不羈豪放を尊ばずして寧ろ着實謹慮を主とす、貧富時あり、吾人亦一雙破履を穿ち雨水を渡るものはこれあるか爲めのみ

○或は云はん、これは一種の規則のみなり然り規則なり、規則はやかて意思の發動なり、意思に

従ふは同時にその人格の感化なる事はすでにこれを説けり

○かくして校風に付て大叫喚は實に於て如何なる効果を殘したるが、曰くたゞ一つ各自校風存在に對する自覺あるのみ、吾人はすでに校風問題か外見に顯はしたる大なる影響を見ざるが故に一度は驚きぬ、然れども其は寧ろ成し得へからざるものに屬せり、今や吾人は内面に深く印刻せられたる校風自覺の跡を見る、何の喜悅かこれにすぎん(五月廿四日空白)

三、

○文學は個人の生命なり、藝術はこれ個性の隠れ家なり、今や社會的進歩は共同的生活を餘義なくし、智識の進歩は個人の自覺を教ゆ、彼に従はんか我が尊重する自我を損し、此に従はんか又大に社會の秩序を破らざるを得ず、現代の苦悶はこの間に存す

○こゝに於てか人事を都合好かれと欲して一塊の糊と一挺の鋏とを以て彼此の思想を圓滿に結合せんとする學者は曰く、眞の自由は服従の裏面に顯はると、大に可なり、或は曰く、眞の自我はたゞ他を愛するを以て最後の目的となすと、大に可なり、然れども現代にあつては寧ろ尙一種禪學の公案なるのみ

○必ずしも自由は獨存のものと云はす、服従は奴隸制度の遺風と云はす、目前の物質文明のすへては悉くこの兩者の結合によりて得られたる者なればなり、然れども心靈の方面を視察せよ、紛々たる形式の束縛多き現代に於て如何に自由なるか、大古の人民は悉く自然に畏怖したり、而して吾人今これを歸服せしめぬ、昔時の民多く神を怖れぬ、而して吾人今や怖るべき神の存在を疑ふ、吾人が思想は愈自由なり、赤裸々なり、而して今や吾人が心靈に威を有するものは

却つて吾人自の心靈なるのみ、哲人曰へるあり、吾人か意思は權威なりと、快なる哉、快なる哉、○かくして最後の威力を有する吾人自の心靈を欺きて如何なる快樂をか買ふべき、よし一切を否定し一切を苦闘するとも吾人は吾人か心靈の要するものを捨て能はざるなり、吾人か心靈の要するものと所謂世の服従と他愛とは果して歸趣を同じくするか否かは、尙吾人に於て未定なり、然れども吾人はこの結論のやゝ樂觀視得るをおほろげながら豫想す然らずんば吾人の苦痛は全く不調和に歸したるよりも大なるものあればなり

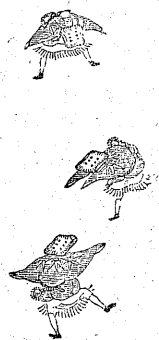
○少くとも此等の苦悶は一切を超越せる文學と藝術の孤島に於て慰安すべきものなり、そは文學と藝術との孤島は、たゞひ風土山川草木を治め多く異なる物あるにあらずと云へども、現世とは全く千里の風を隔て萬頃の波を離れたれば

なり

○文學藝術の孤島は自由なり、然れども一の法令なきにあらず、千古不朽の天才か發布せる法令はたゞにこの土の人のみならず、こゝに存する禽獸草木魚介の屬を悉くよく支配し又一の犯すものなし

○云ふなかれ一切の法則は束縛を意味すと、宣哉、世俗紛々の才子によりて喧騒の間に建てられたるもののみを以て法令と思惟せば或は束縛なり、然れども我が孤島はこゝに遊ぶ如何なるものも皆悉く獨立して立法の大權を有す、人爵に非らず、學識にあらず、富貴にあらず、天地の美を感じ、宇宙の靈を解する者は悉く永遠の立法者たるものなり、世上の法は義務の觀念を伴ふ、我が孤島のもののは歡樂と憧憬とを感ず○一切の學術に強ゆるは暴なりと雖も吾人は自己の良心を欺かざる文藝を望むや切なり、其の

最後に於て一切に調和すると衝突するを問はす、たゞ表面の事象を現して淺薄なる人生觀の下に大膽にも生命の歸着を教へんとする現代の群小作家を忌む(五月廿四日空白)



中	村川田木村岡泉
一	辻藤小齊船西田藤小
一	壘手擊壘壘翼堅翼手
一	捕遊二二三右中左投
校	合藤藤田田井三二
河進安富久安丸鈴渡	
本	左翼手擊壘壘壘翼堅手
左	捕遊一二二三右中投
審判は藤崎君にて、其經過は左の如くである。	
一中	0 0 2 0 0 0 1 0 0
本校	1 0 0 1 0 0 1 2 0
一回	0 0 1 0 0 1 2 0
二回	0 0 1 0 0 1 2 0
三回	0 0 1 0 0 1 2 0
四回	0 0 1 0 0 1 2 0
五回	0 0 1 0 0 1 2 0
六回	0 0 1 0 0 1 2 0
七回	0 0 1 0 0 1 2 0
八回	0 0 1 0 0 1 2 0
九回	0 0 1 0 0 1 2 0
合計	5+x:3

第三學期に於ける野球大會後

此期間に於ける活動は英法三軍である。大會前に一方の重鎮であつた時習寮と戦つて之を敗つた。次は大會前に時習寮を破つて盛名ある獨一組と戦つて獨一方を敗にせしめた腕前はすば

らしいものである。而して遂に覇を報したのだ。扱て此名譽あるチームの人々は栗田久島山崎安藤竹山等が即其人である。

茲に吾人は今學期を以て之等幾多の好野手が校を去らるゝををしむ。特に之迄熱心に我が部を指導して、今日の盛大を見るに至らしめし鈴木栗田山崎久島君等に我が部は滿腔の感謝を以て兄等の大學に行かるゝを送るのである。我が野球部は北辰會野球の歴史に特筆せられべき兄等を永久忘れぬだらう。兄等又大學に赴かれし後と雖も、常に我が部の指導者たらん事を希望してやまない。

來る九月には、新來の球兒を合して球界は再び雜然として、群雄割據、虎嘯龍躍るの活劇が演ぜらるゝだらう。かくて互に競ひ互に争ひ、技益々熟して初めて、信長も出よう。秀吉も生れよう。將た又家康も現れよう。故に吾輩は此

の如き野球期を謳歌し、未來に囑望するのである。(加藤彌一記)

庭球部報

吾が庭球部撰手は南下隊に加はつて大なる勇氣と多くの希望とを懷いて遠征した、天運の時を假さざるを如何せん遂に長き恨を洛陽の地に留むる事となつた、問題は甚だ簡單である只今後一生懸命で練習して復讐を企てる許りた、然り南下隊歸校後の練習は實に癡猛であつた、恐くは星董黨の想像にだも及ばないところであらう、此猛烈なる練習こそやがて來るべき競争に於て三高軍を破るべく確かなものである、然し乍ら吾人は單に三高軍を破るを以て目的として居らぬ、庭球部其ものゝ大發展と大活動とを希望してやまないのである、爰に五月五日を以て庭球部第二回大會を開催さるゝ様になつ

たのは吾々の欣喜禁する能はざる次第である、此時に於て年頃日頃鍊り鍛へたる健腕が尺餘のラケットを揮ひ寸餘の球に響をこめて或は高く或は低く時に強く時に弱く雷光石火と打ち飛ばし敵も味方もこゝを先途と奮戦する様を見ることが出来る、時に我は孫吳をも驚かす様な妙陣奇計を見ることが出来るのである、今當日の競技の模様を簡單に記さう、此日の空模様は素的に好い、此分では雨は勿論名物の風さへ余りに來相もないと云ふので六時頃には已に委員の某々等が見わた何れも喜び勇んでコートに手を入れて居つた、七時半には悉皆準備が整つた、只整はぬのは撰手許りだ、これには實際閉口だ、一体八時から始めるのは少しは無理かも知れぬが其代り寄宿に居る人を比較的早く出て貰ふ様に組合せてあつたのだが其連中できへも中々出て來ぬ、然かも番組の人は

各部報告

野球部報

野球團は南下した時見事に敗けた。應援團諸君の熱烈な聲援、堂々たる應援あるに關らず破れた。我が野球部は何を以て應援團諸君に謝する事が出來よう、願くは六百の健兒諸君、常に其内と外とを問はず此援助を與へられん事を。斯くして初めて我が部は、益々盛大の域に達するのである。

南下の時の試合は別項にある記事の通りである。而し南下した時彼我野球撰手の体度はどうであつたろうか、之を特に諸君に報告したいと思ふ。彼我撰手の會見したのは僅か一週の滞在、中、實に五度の多きに及んだ。

初めは三高方の撰手が(籠の卵を送つて來訪

して呉れた。我が撰手は之を謝し、茶菓を以て迎へ大に談じた。名乗で奮つて居たのが菊地君、久島君だらう。久島君の「北海道は札幌の産アイヌに近い方」などはたしかに珍とするに足る。名乗がすむと御里が分る、それからそれと話の枝がはびこつて、快を盡して分れた。

次は三高で、我が各部撰手、岡山柔道部撰手を招いた、三高等學校撰手の會合で、此日を面白く再び手を握つて分れた。

次は試合の當日で双方撰手は力の有らん限り死力を盡して戦つた。根氣の續く限りベストを盡して奮闘した。

次は當夜兼ての約束で彼我撰手は、三高近傍の一小亭で會合した。向ふでは久野君が手眞似おかしく栗田君のカブに釣られたと話して居る。こちらでは不破君が我が部費の六拾圓内外なるに反し、三高では參百何拾圓だと言ふので

大に嘆じて居た。夕食を共にして快談盡さず、其結果は相互撰手間に文通する人もある様になつた。如何に打解けた會合であつたか、察せらるゝ。

次は三高撰手が彌々東上する日、應援團の二三の人と我が撰手一同は之を七條停車場に送つた。我よりは特に旅中の無聊を慰められたしと、然るべき贈物をし、辰章旗を振つて大に此行を盛にした。即ち彼我野球撰手は又もや手を握つて分れたのである。

茲に於てか吾人は其戦ふや死力を盡し、去つては共に手を握る古武士の風が双方の間に在つたのを、甚だ快事とするのである。早慶野球試合中止事件の如きは何事ぞ。双方共に然るべき申分はあるだろう。而し吾人は此の如き勝敗のみを眼中に置き、意氣を外にする運動競技は好ましくない。運動はあく迄、神聖なるべきもの

である。勝敗は之に興味を附する爲のものではなくてはならぬ。試合は勝敗を争ふものだが、決して運動の根本意義を忘れてはならぬ。此点に於て戦ふやベストを盡し、去つては共に手を握りし彼我撰手の床しき心情を多とするのである。

第三學期の初めより大會に至る迄

南下の事終つてから我が野球部は大に活動し初めた。クラスの試合は毎日の様にある。中には、時習寮などは其練習に於て、其熱心に於て、特に多士濟々の盛大を見るに至つた。

先づ先登をしたのが二部一年と三部一年で、次が英法二年と三年との試合である。三年方には栗田山崎久島などが居る。二年には町田藤崎がある。結局三年方の勝となつた

次は獨法二年と時習寮の試合で、之は前に獨二方に寮方が破られた其後寮から復仇試合を申込んだのだ。寮方は大に勝つた。然し獨二方は

其点数が示す程たしかにもろくはない、クラマチームの先鋒をした獨二だから、之からも大に奮發してもらひたい。

時習寮は活動の手初めに獨二組を遺憾なく破り、其勢は旭の登るが如く、將に天下に覇を唱へようとして居た。

此時に當つて新に現れたは、獨法一年で、先づ立つて英二を破た。今や野球の天下は三分されて居る。英三、獨一、時習寮は即之だ。英三は一度英二を破つてからは容易に動かぬ。

茲に於てか時習寮と獨一の兩雄は決戦した。

寮方は海部石渡山本富田櫻井秋山丸井奥富小池である。獨一方は谷渡邊七渡邊儀帶金稻本小林柏倉工藤岡田である。勝は遂に獨一方に歸した。

以上は今學期間、野球大會前の重なる試合で、此外混合マッテや其他もたくさん有つたが餘り多いので盡く見る事が出来なかつた。

野球大會

櫻花散じて、青葉の候に入らんとする四月三十日我が校庭に於て野球大會は開かれた。白きラインは心地よき迄に廣き校庭に引かれバットの響、クラブの音、實に壯快な一日であつた。

第一回 混合試合

軍	田儀田澤川谷場進部
紅	横小浅朴長永的小色
投手	擊壘一二三右中左

軍	八田根富川池井井本
白	邊上山奥今小櫻大山
投手	擊壘一二三右中左

山崎君審判官で、其經過は次の如くである。

紅軍	白軍
0	0
1	0
0	2
2	1
0	2
1	0
0	0
0	6
2	
合計	12:8

第二回 混合試合

第二回混合試合、之ぞ本校の粹を集めた精鋭である。第一回の混合試合は面白い然も野球として立派な試合で有つたが、之は又一際堂々たるものがあつた、即兩軍勇士の位置及び打撃順は

紅軍	白軍
崎島	田破
山久	町不
前田	邊藤
本田	邊横
藤田	海渡
加藤	石矢
今田	ケ崎
盛山	
秋山	
中堅	中堅
左翼	左翼
右翼	右翼
三投	三投
二壘	二壘
一壘	一壘
捕手	捕手
遊撃	遊撃
三捕	三捕
二左	二左
一右	一右

石川一中と本校との試合

第二回混合試合はさすがに本校の精鋭だけに、立派な試合であつた。老練家だけに巧妙な試合であつた。今度の試合は上手な点に於ては迎も及ばぬ。巧妙な点に於ては無敵かなわぬ。而し對外試合だけに力瘤の入る試合であつた。曇天に關らず朝から多數の見物であつたが、第二回混合試合が終る頃には、一中の撰手が來たので、其應援隊と共にネットの兩側の人垣は彌々重り合つた。一中の撰手及び我が出場者は

審判は鈴木君で、経過は次の如くである	紅軍	白軍
第一回	0	0
第二回	0	0
第三回	2	1
第四回	0	0
第五回	0	0
第六回	1	0
第七回	0	0
第八回	0	3
第九回	0	0
合計	2:7	

端から半端になつてしまふ委員のこぼすのも無理はない、まあ色々組代りを入れて八時半には始める様になつた番組及び勝負を示せば次の通りである、

(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
宮田	大久保村	渡邊七	久渡邊島	小長谷川	松飯盛	磯松室	勝水郡野
尾崎	島津	牧森	伊湯	辻宮崎	藤鈴木三	櫻築井瀬	木林澤
廣木	下村	栗田	渡邊龍	長谷川	飯盛	松室	星野
唐崎	國峰	森川	湯川	宮崎	鈴木三	築井瀬	林澤

(18)	(17)	(16)	(15)	(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)
○ × ○ × ○	○ ○ ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	× ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○	○ × ○ ○ ○
藤新	本茶	大太	上田	進櫻	渡大	高松	陽守	奥京	山岡
森井	谷野	橋田	原部	藤井	邊得	田村	山	住極	川崎
	(石師)		先生	基					
小越	今森	松茂	八本	岡成	清池	織川	竹富	長原	奥石
川田	田下	田野	波間	本川	水部	田上	山武	澤田	富渡
(一中)			先生						

以上三回ゲーム

- (19) ×○○○ 宇加野納 石川(一中)
 (20) ○×○○ 石鶴川(工業) 坂松井(金商)
 (21) ○○○ 山峰下 吉堀村(二中)
 (22) ○○○ 山關野(富中) 中水上島
 (23) ○○○ 小林儀 富田愛 吉中山(二中)
 (24) ×○○× 北村(醫專) 矢ヶ崎崎
 (25) ○○○ 前田 坪高見(富商)
 (26) ○○○ 馬谷(小松中) 井赤祖父(醫專)
 (27) ○○○ 江森守 山熊木(石師)
 (28) ○○○ 辻田(一中) 井上田(富中)

以下雨の爲め中止

- (29) 小林 佐藤
 (30) 金子 中川
 武者 稻本

以上五回ゲーム、

いま右の中面白かつた組を特に記して見ん、

(5)の組は双方力がよく釣合つて居つた渡邊のサーヴが殆んど此勝負をさめた様なものだ久島君は野球の勇將タニスには日が尙淺い、然し時に奇功を奏したが要するに官費旅行の方だつた

(6)は双方共よく戦つた一回目には渡邊一人で戦つた然し栗田の絶えず敵を威嚇して居つたのが蓋し此勝に預つて方ありた、二回目には栗田の前衛中に成功した、時には後衛の渡邊飛び出して前衛の仕事をして奇功を奏した、

(9)一回目にはボースまでやつたが最後に岡

崎のアウトボールを奥富が受け取つたのが失敗で負けた、然し技倆は確かに石渡組にあると思ふ二日目には石渡組勝つたが次に負けたのは惜しかつた、

(10)京極組は去年の大会に大分面白い勝負をして負けた組だが今度も實に面白い勝負をやつた、一回目には原田と京極組の奥住どがミスくらべをして居つた様だ、京極君の無茶苦茶が例の如く成功した、

(12)松村組は何れも昔執つた杵柄で矢張り上手だ、二回ともワンゲームで苦も無く勝つた、敵某の白靴が時々すべつたので思はぬ失敗を來たしたらしい、此邊のコートでは矢張り靴は不適當の様だ、

(14)櫻井組は新進の撰手だ、二人共中々の要領がよかつたとの一般の評だ、進藤は矢張擊劍の調子でチョココやるのだから

各部報告

(16)太田君はバックの方が余程正確だ、一回目にレシーブでゼロゲームにして置き乍ら二回目には二人共大分ミスした處から見ると此組はレシーブの方が得意の組らしい。

(17)森下の球は中々延びて居るが余り延び過ぎてアウトをやる恐れがある、競争に馴れぬのと今田君と組初めての爲め此失敗

を招いたらしい、然し一回に三度もアゲ
ーをやつたのは余り感心が出来ぬ。

- (18)新井組のミスの多いのには感心だ、酷評
かも知らぬが此の組の勝つたのは自分の
コートであつたかららしい。新井君はサ
ーヴとバックの研究が目下の急務かも知
れぬ、

- (22)關野組は中々立派な組だ、水上君は、
コあがつて居つたらしい、中島は己は負
けたつて天下の大勢にはナ、モ關係せん
と云つた様な調子でポカ／＼と打つ球は
よく出るかはりに又よく網にもかゝる、
(24)五回ゲームの内五回まで決戦したのは
矢ヶ崎組と新井組とある許りだ、矢ヶ崎
組は京都では非常によく戦つたが今度は
少しく機關が狂つて居つたらしい、矢ヶ
崎の當る時には山崎が失敗する山崎の當

る時には矢ヶ崎が失敗するときまつて居
つたらしかつた、然し中々美事な勝負だ
矢ヶ崎の時々敵の前衛北村を抜いたのは
思はず快哉を叫ばしめた、要するに北村
組勝ちに非ずして矢ヶ崎組が勝たざり
しなりだ、

- (25)富商の高見組は非常に強いと云ふ當日の
呼び物だこちらもバック組として有名な
前田組だ、火の出る様な面白い勝負が見
られるだろうと思つて居つたが高見組は
評判程處では無い丸で下手だ、あれでは
一回も勝たずして退いたのが尤もだ、然
し前田組の技が余りに秀で居つたから
でもあらう、

- (26)小松中の馬島組は實に上手だ然し前衛の
活動は稍物足りなかつた、赤祖父如何に
腕を張つても勝てなかつたのは向の後衛

が沈着で正確であつたからだ、

- (28)富中の吉田組は矢張り當日の呼び物であ
つたが一中の辻組に造作もなく負けたの
は如何したのか、余の目には吉田組は練
習に於て強相に見えた丈だ、

- (26)佐藤秋山は本校の重鎮だ、小林、高は醫
專校の重鎮だ、秋山の輕快なるモーショ
ンと佐藤の正確なるプレッシングには殆
んど敵もあるまい、火花の飛ぶ様な勝負
は當に此ゲームに於て見られるだろうと
思つて居つたに悲い哉、風は益加はり火
花は飛ばずして砂煙が飛びたまけに意地
悪き雨が降り出したのでデウスまでやつ
たが中止となつてしまつた、

午前中に張りこんだテニス日和も何時しか變な
天氣となつて風は容赦も無く吹くし砂は遠慮な
しに人の目に飛びこむ目も口もあけられぬと云

こんな天氣を云ふのだろう、風は公平に敵も味
方も同じ様に吹くのだから構はぬが目の中へ這
るには一番閉眼だ、今日は風の爲め面白い勝負が
無かつたからかも知らぬが彌次は比較的靜かだ
つた、袴をふり廻して競技者の障を市す者も無
かつた、然しヤンヤと云つて奇功を賞めて居る
中にお初の夏帽を風にどられて風に小言を云ふ
のと囁きなどが口の中で一處になつてムニヤ
／＼云つて居つた連中もあつた、

兎に角風の爲めに實際の技倆を見る事の出来な
かつたのは實に残念であつた、終りの二組が花
々しき勝負も雨の爲めに中止するのやむなきに
至つたのは返す／＼も恨めしかつた、

去年の大會には本校が頗る不成績であつた由其
記事で見ただが此度は非常に成績が良い、負けた
組が三つある許りだ、これは皆平日の練習によ
つて得たる技倆を充分に發揮した所以であると

思ふ、當日河合君は旅行に出られて競技に加はるを得ざりしと渡邊二郎君が或る事情の爲めに出技することの出来ざりしとは實に惜しい事である、尙練習に練習を積んで前衛のモーション、後衛のプレーシング等研究すべき点を充分に研究されむ事を希望してやまない次第である、

(K I 生)

々の氣に溢れ、瓏々として進み行く樂音に、恍惚として憧憬し、無我の境に神遊して、共に一夜の歡樂を盡したのであつた。
演奏者凡て九名、來會者無慮三百餘名、設備の不完全なるに關らず、練習の不十分なるに係らず、かばかりの成功を告げたのは、實に吾人の狂喜に堪へざる所であつた。

演奏曲目

第一部

音樂會記事

京極逸三君

北海の濤聲幽かに、半宵の夢を破り、天地雪に埋れて、眼の行く限り白濛々として、北國は春猶寒かりし頃、過ぐる紀元節の當夜、午後六時より盛天なる四高音樂會は、電燈燦爛たる至誠堂裡に開かれたり。

蓋し本校創立以來此の種の會合は、之れが嚆矢であらう。吾人は、嬉れしき新春の宵を、露

- 一、開會之辭
- 二、君が代 三部合唱
- 三、ヴィオリン合奏『怒れる勇士』
ウエーベル作曲
- 四、獨逸國歌 (Die wacht am Rhein)
- 五、ヴィオリン、オルガン合奏『松明行列進行曲』
ガントレット先生
梁瀨成一君
- 六、合唱『大海原』

以上

- 七、オルガン獨奏『水車』ガントレット先生
- 八、唱歌『海國男子』
- 九、チター獨奏

スタイナー先生

熱誠なる京極君の開會の辭終ると共に、漸次演奏が始まつた。

第二部

就中ガントレット先生は、實に當日のオーソ

- 一、英國々歌 (God save the King)
- 二、ヴィオリン聯奏『ロンド』マザス作曲
梁瀨成一君
寺崎良策君

三、合唱『郭公』

リチーで、先生の妙抄たるや、殆ど神に迫り、吾人をして恍として夢幻の境を逍遙せしめた。
スタイナー先生のチター獨奏、亦魂飛び、神逸するの概あつた。

- 四、オルガン獨奏『競走』ガントレット先生
- 五、合奏『殘夢』
- 六、尺八『雪』
- 七、合唱『撰手を送る』
- 八、ヴィオリン獨奏『古代舞踏曲』
乙「ユートビヤン、ワルツ」

梁瀨成一君

梁瀨成一君は、四高音樂會の絶才である。君が獨得の妙手や、夙に斯道の専門家をして瞠若たらしむる所。吾人は平凡なる讃辭を呈するを欲せぬ。當夜は本會の指導者として、殆ど君が獨舞臺の觀があつた。其の得意と思ふ可しだ。

合唱『大海原』『郭公』『殘夢』等に、盛んに

- 九、合唱 甲「いざうたな」
乙「日本男子」(佛國々歌)
- 十、オルガン獨奏 甲「樂しき農夫」
乙「殘陽」
- 十一、校歌合唱

美聲を振つたのは、我がボーカリストの泰斗、

猪俣昌藏君其人だ。吾人は君が朗々として清美なる妙聲に、陶然として酔うが如き心地を感じ

た。

其の他西山寺崎君等の諸氏、たしかに亦秀才たるを失はない。殊に西山君の幹旋の勞は、吾人の感謝に堪へざる所であつた。兩君とも熱心なる斯道の研究者で、大成近きにあり。刮目して將來の進歩を待つべしだ。

若し夫れ曲目の細評に至つては、吾人門外漢の知る限では無い。只々全曲悉く非常の喝采を博制し、多大の満足を以て歡迎せられたと言ふの外はない。

最後に單簡なる閉會の辭があつて、至誠堂も破れよと許りに、校歌を三唱して散會したのは、九時過ぎであつた。

連日降雪霏々紛々として、頑雲暗澹たる北國空も、今宵は碧空を點破して、辰星高く、不斷の樂をさゝやくに似るが如き心地した。

(K B 生)



投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限る

一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず

一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

明治四十年六月十七日印刷
明治四十年六月二十日發行

編輯兼發行者

吉村政行

印刷者

生沼倍男

印刷所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地

同縣同市穴水町二番丁廿九番地

同縣同市高岡町九十番地

